
外道の王

闘神自殺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外道の王

【Nコード】

N1880Z

【作者名】

闘神自殺

【あらすじ】

他のサイトでも投稿しています。

PKプレイヤータクの外道にして卑劣なる日々。

ハイエナ稼業

ある春の、深夜のできごとだった。

暖かくなってきたから夜でも野宿が楽だなーと思いつつ公園のベンチの上でダンボールに包まって寝てたノックさんは、いきなり叩き起こされ、親指でクイツと城の方を差す仏頂面の兵士に『来いやあ』と言われる。

『来いやあ』と言われてしまえば『行かないやあ』と言い返すワケにもいかない立場の弱い住所不定は、まあメシにでもありつけりや幸いと思い、ブツクサ言いながらも兵士に着いて行っった。

普段は近寄ることすらできない、深い堀で守られた堅牢な城門を通り、歯車で駆動する人力エレベーターで最上階にある『王の間』に着くと、高い場所にある玉座にデンと構えていた王様に、『50Gと銅の剣やっから魔王殺ってこいや』とお願いされてしまう。

スライム相手にすら大苦戦するノックさんは『あ！？ 知るか！ 死ね！ デブ！ ヒゲ！』と、言いたい放題叫んで首を横に振るが、それまで温和だった王様は顔を鬼のように変貌させ、親指でカッと自分の首を切り、直ちに『勅命』を下す。

『そ、そんな……！』

ノックさんは、ガックリ膝を落とし天を仰ぐ。

でも王様は、そんな情けない姿を見ても、リスのように頬を膨らませて喜ぶだけ。

このままでは殺られる。

ジジイのなんとなくな気まぐれで殺られる。

(……どうせ)

追い詰められたノックさんの眼に微かな火が点った。

(どうせ死出の旅に出されるくらいなら……)

上体を起こし、膝に力を込める。

(いっそ……！)

暗い憎悪に燃えたノックさんは、懷に隠し持っていた短剣をギュッと握り締めた。

その一方、ノックさんの恨み骨髓な気持ちにも気付かずニヨニヨしている王様は、攻城兵器の直撃弾ですら受け止める不可視の強力な魔導障壁によって守護され、大磐石の構えで下々の輩を謁見に招いている。護衛すら付けてない余裕っぷり。

そんなこととは露知らず、臆することなく前に出るノックさん。
カッコイイぞノックさん。

いや、でも、臆してはいたかもしれない。

足元をよく見ると、膝がガクガク震えていた。

『お、往生せいやああ！』

『ぬわーっ！？』

ノックさんは、玉座の前に積まれた旅の仕度金を受け取ると見せかけ、王様の懷に倒れこむようにして心臓を一撃した。

驚いてノックさんを突き飛ばした王様は、鮮血に染まる左胸を押さえ、唇をわななかせ、信じられないといった表情でかぶりを振り、よろめきながら玉座にもたれ掛かると、遂には生命活動を停止——死んだのだ。

『やた！ やったあ！』

晴れやかな顔でパッと起き上がり、死体の前でヨサホイと小躍りするノックさん。

バチバチバチ！！

『アチッ！？』

調子にのって魔導障壁に肘が当たり、電撃のような衝撃に悲鳴をもらすノックさん。

ドジなノックさん。

だが、それでも王は死んだ。

玉座の前で果てている。

そして後に残ったのは元王であつた男の遺体と……大きな疑問。一切の抵抗もなく強力な結界をすり抜けたノックさんのその腕は、ポタポタと滴る鮮血に染まっていた。

翌日。

【城下街・噴水広場】

『ふん、こんな小汚いジジイの肖像、全部焼いてしまえ』

王様職ゲツトして調子ノリまくりのノックさんがそこにはいた。

ノックさんは兵士達に命じ、前王の痕跡のいっさいがっさいを城下街の噴水広場で焼き払い、抵抗する王の側近とその家族を全員縛り首にして、市民に絶対的恐怖を植え付けていた。

【深夜の街外れ・ラーセ教ファルン教会】

『フン、ワシの国に人心を惑わす宗教なんぞ不要だ。この馬鹿でかい教会も焼いてしまえ』

『や、やめてください！！！』

松明を掲げた兵士100名が、命じられるにまます教会をぐるりと取り囲むと、教会の神父が大慌てて止めに入って来た。

『よいですか！ 我がラーセ教は大陸に本山をかまえる信徒20万人の大宗教ですよ！ いくら王様といえど、こんな勝手はゆるされません！』

『邪魔ナリ！！』

『天よー！』

ノックさんは、必死に腕にしがみつく神父を強引に振り解き、腰に提げていた宝剣を抜いて額をグサリと突き刺した。グサリといか

れた神父は生命活動を停止——死んだのだ。

『やめてください！　なんということを！』

『邪魔ナリ！！』

『ジューザース！』

止めに入ったシスターをバツサリ袈裟斬りするノックさん。
恐るべきノックさん。

悪鬼羅刹と云えど今のノックさんには及ばないであろう。

『王様、中に子供達が大勢います。全員孤児達です』

『フン、移民を片っ端から受け入れるほど寛大な国じゃない。ちょ
うどいい。見せしめだ、焼けイ！』

『そ、そんなひどい……』

あまりに無慈悲な命令。兵卒は戸惑った。

これでいいのか！！

こんな世の中でいいのか！！

王を止められるのは今ここにいる自分だけじゃないか！？

と葛藤はしたものの、べつに自分の胸が痛いわけでもないので、
ことなかれ主義の兵卒は部下に号令して、いっせいに火を点けさせ
た。

八方から火を点けられたたちまち燃え上がる教会。予めたっぷり獣
油をかけた純白の壁は無惨にも溶けて焼け落ちていく。

『ぎゃあああ！！　熱い！　熱いよおお！』

『出して！　出して！　お願いいいー！！』

遠巻きに見ているだけでも肌を焼くような劫火が教会をゴウゴウ
と燃え上がらせた。赤く染まった教会からは、耳を塞ぎたくなるよ
うな子供達の悲痛な叫びが漏れて来る。

『おい！』

『は、はい』

ノックさんが、羊の毛並みをしたカバのような体格の馬上から軽

くアゴをしゃくると、長槍を構えた武装騎士が、火に追われ外に逃げ出そうとする子供達の手や顔を次々に突き刺した。

顔を出せば殺されると解っていても熱や煙に追い立てられた子供達は苦しさのあまり耐え切れず、留まることなく手足を隙間から這い出させ、そして無惨にも殺されていた。

『ぎゃっはっはっは！ あー、おかし！』

オンラインRPG・YMR。

壮大なる世界の一端で起こった1つの物語の幕開けであった。

俺はタク。高校一年生。

ちよいと理由があって”今作の”YMRは初心者で参加している。今は自宅の自室に籠もり、パソコン画面を通じて、キャラクター・エディットで作成したキャラをオンライン世界の待合広場で試しに操っている。慣らし運転中というヤツだ。

蹴り、蹴り。

フック、ジャブ、ロシアン・フック、ジャンプして二階の縁にブラーンと掴まり『ブラッサガリ（高位のジェダイのみが使える必勝闘法。ブラ下がった状態から敵にカウンターを仕掛けるという、死中に活を見出す一発逆転の大技）』。

チュートリアルで前作との動作の仕様変更を一通り確認した俺は、受付に敷設されている転送機の画面から契約したサーバーを選択し、画面に表示された島内マップを指でなぞってカーソルを移動させ、安全そうな転送場所を選んで決定ボタンを押した。

青紫色の無数の光の輪に全身が覆われると、体が光の粒子へと換わり、大きな光に包まれたかと思うと、次の瞬間には転送先の街役場に立っていた。

『はいはい！！ ガルンド城塞攻略イベント受付終了です！ 次の番号札をお持ちの方どうぞ！！』

『再審の申請書ですね？ 受付カウンターの三番へとお並び下さい！』

『おい、さっきここに並べって言われたぞ！？』

『お客様、クレームなら七番の——』

普通の市役所みたいな街役場は、大小様々な人種の冒険者達が集い、叩き売りでもやってんのかという物凄い喧騒に包まれていた。

十五階建ての白亜の施設に常駐する十数名の警備スタッフは、一般プレイヤーから有志を募ったボランティアで、数世代前から連綿とYMRの歴史を築き上げて来た魔王殺しでありドラゴン殺し、という精鋭だが……そんな精鋭達がテンヤワンヤになるほどの超混雑っぷりだ。

安全Ⅱ公共施設——は、考えが浅薄だったな。

次からは移動場所をさらに一考するとしよう。

イベント申請やクレーム対応などでごった返している役場からどうにか外に抜け出た俺は、各所に設置された案内板に従い、この国の中央に位置する公園の噴水広場を目指す。

空は一点の曇りなき青空だった。

幅広く整然と舗装された石造りの道はチリひとつ見当たらず 陽射しに映える美しい緑がところどころに窺え、中世時代を彷彿とさせる石垣と煉瓦仕立ての立派な城下町は、歩いているだけでヨーロッパ観光気分が味わえる名所だ。

少し歩くと清涼なる小川のせせらぎが聴こえ始めた。

水源が豊富なこの土地では、街中の移動に小船が使われることも多く、船が通れるようにと道の至る所にアーチ状の橋が架かっていた。その橋をいくつか渡ると、道幅がさらに広くなり、馬車や獣車や、大型ドラゴンが牽引するミスリル戦車などの大型車両が行き来する城下町の分岐路——広大な森林に囲まれた、大公園の噴水広場へと辿り着く。

スキーのジャンプ台に似た、虹色の大階段から一望した広場はかなり見通しが良く、もしイカレたヤヴァイのが「死ねやオラ！」と襲ってきても一目散に逃げる事が出来るだろう。そこかしらに散見するカップルは不快だけど、人の流れも多いし、とりあえずの安全地帯と言える。

（よし、ちよつと話しかけてみるかな）

久しぶりのオンゲだし対人の感覚を掴みたい。

そう思った俺は周囲を見回し、最初に目に付いた、静かな木陰の方へと移動した。

『あの、少し訊いていいですか？』

『ン？ なに？ どうしたの？』

いきなり上級者に話しかけるのは少し腰が引ける。街灯の前のベンチで、退屈そうに足をパタパタ遊ばせていたアマゾンに軽くアプローチしてみた。

『初心者なので、もしよろしければ、この街のことを教えて頂けませんか？』

『ン……どうしょ？ ねえ、ミッキー？』

断じてナンパではないが、誤解したアマゾンは『少し照れたような』モジモジした風な態度で後ろに隠れていたゴツイのに話をフツた。

プレイヤーが操作しているキャラの表情は、指や耳や頭や手首などのいづれかに装着している極薄の測定器の計測によって緻密に表現され、その変化から、それなりに相手の感情や心理状態を読み取ることが出来る。

手招きされて、大樹の陰からノツソリ出て来たソイツは、亀の甲羅を連想させる重厚な緑の鎧を着込んだ大型の戦士だった。

（遠くに立ってたから他人かと思った）

『べつにいいんじゃないかな？ 初めまして、グレート・ソルジャー『超戦士』をやってるミッキーです』

『あ、どうも。騎士^{ナイト}の”タク”です』

『超戦士』とは、ギルドに所属する戦士が五度のジョブチェンジを経て成る、戦士系の最強キャラ。最低でも1500Lv以上ということだ。

コイツと比べりゃLv2の自分なぞ虫ケラ同然。

まさに雲の上の存在。

『ハハッ、緊張しないでいいよ。べつに取って食おうとしてるわけじゃないしね』

大仰な外見の印象と違い、ミッキーは意外と礼儀正しい人だった。可愛らしい名前からして女性かな。少し年上かも知れない。

『この国は大陸から南東に位置する孤島で、経験値稼ぎにもってこいのモンスターが棲息するダンジョンがあるから、けっこう人の出入りが多いわ。ここできれ取れないレアアイテムも多いし、彫金に最適なレアメタルも発掘されるので貿易関係でも潤っている。でも最近王様が代わってから、島外の――別のサーバーからの新規流入者が減ったの。王様がムチャクチャ言って、街中での”PK”――戦闘向けじゃない一般プレイヤーへの攻撃まで推奨してるから、略奪があちこちで多発してる』

『この辺りは中立地帯だよ。噴水広場を挟んで北側に王都があって、その王都を茎として扇状に右から商業区、ギルド、闘技場、市街、海商区、高級住宅街があるわ。それぞれの区には元締めがいて王様でも勝手は出来ないの。今のところ城下街でしか酷い政策は打ち出されてないわよ』

ミッキーに続いてアマゾンが親切に教えてくれた。

『まだレベル低いみたいだし、キャラ捨てて別のサーバーに替えれば？』

去り際にそうアドバイスしてくれたアマゾンは、余ってるからと言って、俺に『クリスタルソード』を渡してくれた。

感謝……圧倒的な……ツツツ!!

俺はその場に膝を着き感涙してみた。

それを見たアマゾンがギョツとして、ミッキーに隠れながらそくさ立ち去って行ったのが何か心に残った。

『クリスタルソード』ってのはそう珍しくない武器だ。

魔法によるステータス異常を半減、または無効化させられる安定した特殊能力あり、魔法を使えない戦士系のキャラは中盤でけっこう重宝する。確か売ればそここの金になるはず。貰ったモン即行で売るほどセツパ詰まっちゃいないけどな。

さあて、そろそろ始めるか。

俺の得意とするクソ外道プレイを。

用心深く執念深く、下品で陰湿で卑劣で、こそこそアイテムを横盗りしたり、弱っている人間を後ろから不意討ちで仕留める『ハイエナ・スタイル』だ。

そして、そんな周到な俺が操作しているキャラは見た目どおりのヘボキャラではない。前回のYMRキャラを特殊なアイテムで今作へとコンバートしている。

宝石など金目の道具を大量に持たせ新規に引き継いだ俺の”タク”は、能力値補正アイテムをありったけ購入して1つの能力値だけを突出させている。

スピード——逃げ足を。

このキャラ、外見こそザコそのものだが、足の速さ”だけ”は天下一品。横からアイテムをかつぱらって、特に足が速いとされる高レベルの忍者や盗賊なんかに追っかけられても、そう簡単には捕まらないほどだ。

高校受験のために10ヶ月遅れで参加を果たした俺がてっとり早く強くなるためには、多少の奸智を働かさねばやっていけないのだ。さっき話したミッキーとアマゾンのように、誰か強いキャラの後ろにひっついておこぼれを戴く――そんな生き方もあるだろうが、それは正直嫌だ。受け入れられない。人に媚びるぐらいなら殺してでも奪い取った方がいくらかマシだ。

俺は殺られるのは好かないが、正直”PK”は上等である。

クリスタルソードは今のところ必要ないので、近くに居た初心者っぽい騎士に5000ボルふっかけて売っ払い、その足で城壁の外――冒険の舞台へと旅立つ。

荒野のフィールドに出てから何度くらい罵声を浴びただろう。

一撃喰らえば即死確実の雷撃や火炎、斬撃を避け、黙々とアイテムを横盗りしては売り払い、たまに出るレアなアイテムを次の励みにへと変える。

そんなことを半日も繰り返せばひと財産。どうにもならないイレギュラーで一度死亡したが、金はこまめに預けてたのでマイナスは少なかった。

『ふふん♪ ぬふふん♪』

荒稼ぎして、意気揚々と帰還した俺を待っていたのは――犯罪者としてのレッテルだった。

城門前の街役場の掲示板では、王殺しや国際テロスト犯などのそうそうたる超A級極悪人どもといっしょに、いつの間に撮られたのか、俺のキャラのキャプチャーが張り出されていた。

意外に早かったが予想していた結果だけに苦笑しかこぼれない。俺は完全にお尋ねモンになったのだ。

WANTED 賞金3600ボル
ハイエナのタク（騎士）

久しぶりのネットゲだったし、終始追っかけ回されて精神的に疲れた。手持ちの不要なアイテムを換金して銀行に預け、俺は早々に口グオフした。

今回は強化アイテムを購入した差し引きで、収入は1万7000ボル。初期にしちゃ悪くない。その中で消費レア・アイテム『死神の怨讐』と『護りのタリスマン』を手に入れた。

『死神の怨讐』は、使用すると自分を殺した相手の居場所をどこにいても捜し出すアイテムで、『護りのタリスマン』は、アイテムソケットに突っ込んでおくと、死亡時に科せられるアイテムの損失や、経験値ゼロや、所持金半分などのマイナスペナルティを受けない。どちらも使えば無くなるが、レア度は十段階の評価で星五つ。満足満足だ。

予想以上の釣果に頬を緩ませ、俺はPCの電源を落とした。

「ふう……肩こったな」

オンラインから現実への帰還。

体がうつすら熱をおびて、頭の中が少しボンヤリしている。

この余韻をもう少し味わっていたいが……残念ながら、画面から離れれば、作業ゲーのような日常を終わらせなければならない。

俺は勢いをつけて席を立ち上がり、汗かいていたから風呂に入り、それからメシ食いに外出した。

ファミレスでメシ食った帰り道にコンビニ寄って、烏龍茶のペットボトルとビーフジャーキーとジャンプ買って、商店街のゲーセンで新作の格ゲーちよいとつまみ食いして、それから家に戻る。

「ただいま」

誰もいない薄暗い玄関。

両親は共働きなのでけっこう家を空ける時間が多い。

居ないと知りつつも帰りの挨拶を欠かさなのは寂しい現代っ子のサガと言えよう。

二階の自室に戻り、P Cに電源入れてBBSをチェック。スレツド形式の掲示板を流し読みしていると、俺の名前がほんのチラリとだが載っていた。

【獅子王】

足の速いのにいきなりやられました

【桂歌麿】

最悪だな 今度見かけたらシメときマス

【獅子王】

きつと寂しいヤツなんだよ

【ジャクソン5】

——つうかあの島PK多くね？

【ひゅんける皇帝】

難易度も鬼高い

レベル732の聖騎士が地下4階で鬼蜘蛛の大群にウボア

【ドモホルンリンクル】

誰か輪廻の数珠玉ゲットしてね？

最後の一個手に入らんわ

ふむふむ……。

まあ初日だし、悪評はこんなところか。

気に入りのエロサイトを巡って更新をチェックしてから、メールBOX確認して、今度こそ電源を切った。

マジで疲れた。

もうオナニーすんのもめんどクセえ。寝る。あした学校あるし。

じゃあな、暗転だ。

翌朝。

【私立もずく高校・一年二組の教室内】

俺は学校での時間も惜しみ、持ち込んだモバイルでキャラクターの効率的な動作を模索し組み合わせていた。

キャラクターは別売りのツールを使用すると細分化されたモーションを選別して、他人のキャラクターと挙動を差別化することができる。数百種類の動作の掛け合わせ組み合わせでアルゴリズムを組み、自分だけの完全オリジナルキャラクターを作成するのだ。

少し難しいことを言っているみたいだが、実際使い慣れればそんなに苦労しない。素人でも、一日いじってれば簡単な動作を組めるだろう。こんな感じにカユイところに手が届く仕様がこのゲームの人気のひとつでもある。

俺は自作のパッチを当てて、自宅パソコンのUSBを通じモバイルにデータを送信した。今はそいつで少々念の入った『コンボ（連続技）』を組んでいる。

逃亡専用動作を。

【土下眠】

かのロシアンファイターが慣行した、文字通りうつ伏せに寝る、土下座を超えた究極至上の謝罪。

デフォルトキャラは腰より下への攻撃は簡単に出せないから緊急回避としてはもってこいだ。

【土下眠ローリング】

土下眠のまま横に回転する、修学旅行の就寝時などで、ちょっと浮かれすぎな奴がやらかす高速回避運動。

【目潰し】

対象に砂を掛ける。

【目潰しダブル】

対象に連続して砂を掛ける。

【肛門エクセレント】

組み合わせた指先をドリルと化し、敵の肛門を破壊して便秘にする（ゲーム内はリアルを追求しているので食事や排泄や就寝まで設定され、日常習慣を怠るとパラメーターに影響する）。

プログラムが大方組み終わる頃には学校も終わり、俺は迷わず家に帰った。

「ただいま」

誰も居ない家で挨拶を欠かさない。

アイ・アム・寂しい現代っ子。

部屋に戻り、制服の上着をハンガーに掛けるついでにPCの電源を入れた。SSDを積んだ高速起動のパソコンなので、あっという間に画面にOSのロゴが浮かび上がり、YMRに関するプログラムが自動で開始する。

苦心して組んだモーション・プログラムをプロパティでキーボードの各キーに配置し、軽く動作チェックしてみる。極力無駄を排した俺の『タク』は、予想以上とまではいかないが、なかなか鋭敏な動きを魅せた。

準備万端拔かりなし。俺は拠点としているメインサーバーを選択してキャラクターを起ち上げた。

さあて、現実逃避タイムといきましょうか。

『しまった……』

うっかりして、昨日と同じ街役場を転送先に選んでしまった。

昨日やってみた”貸し倉庫1日無料体験”が満足だったので、直接海商区に跳んで月極契約したかったんだが……この失敗で目的地まで遠回りになる。面倒クセエ。

俺は昨日と同じように、罵詈雑言飛び交う街役場の中を押し合いへし合いしてどうにか脱出し、疲れきったウンザリした顔で海商区へと向かった。

【海商区湾内】

貿易の要である海商区では、外敵に備えたマリン・ブルーの長大かつ重厚な壁が湾を覆うように続いている。

二大大陸の中継ポイントに位置するファルン貿易港は、安全な貿易を望む多くの取引相手から要衝としての機能を求められ、世界の平和を憂う”篤志家”から集められた巨額の資金によって世界有数の強大な軍を設立し、万里の長城を思わせる巨大な壁を建設し、鋼鉄の戦艦を撃ち貫く『魔光砲台（魔力によって熱閃を放つ長々距離砲）』数百台を備え付けることで”最低限”の自衛措置を採っている。

以上、タテマエ終了。

湾内で特に盛況なのは、大陸から輸入されたブランド品を扱う卸売り市場で、異国の非常にめずらしい一品モノの装飾品や武器が手に入る場所なので、アバターのファッションに命を懸ける御嬢様方や冒険者が殺到し、ボサツと立っていると人波に押し流されてしまいそんな活気がある。

市場の大通りを抜けて船着場の方を見ると、大型重機を彷彿とさせる身の丈40m級の巨人族が、西洋風の屋敷を丸々抱えてガレー船から降りようとしていた。巨人族の歩みで船と港と繋ぐ木製のタラップが大きく沈み、それを見た周囲の作業員は蜘蛛の子散らすように逃げ出す。

さすが、他民族、他宗教が交差する世界の中継地点だ。クロス・ポイント他にも大勢めずらしい種族が集まっている。

たくさんの樽の上をチョコチョコと走り回る三匹組みの『走蜥蜴』ラン・ライダー、シースルーの薄手の布を肩から膝下まで下ろす、麒麟のように首長で、顔の周りに花卉を付けている不思議なヤツは『華花々（ホワ
ンチャイ）』だな。

おっ、鎧のような鉄塊を操って木箱の中身をセッセと荷詰めしているのは、体長10cm足らずの、無機物に寄生出来る1つ目の『
モガンガル
機甲族』だな。あいつらも珍しい。

『おお……!!』

『魔族だ!!』

世界中の珍しい種族の数々に目移りしていると、港の端の方で大きなよめきが立った。視線を追って見ると、鯨のように巨大な、紫色の鮫肌の怪魚が港に就いていた。

『ボエエエエエエツツ!!』

怪魚が大口を開けて汽笛のような大声で鳴くと、その口の中から、長く太いブルーベリー色の舌の上を歩いて、黄昏色の優美な法衣に身を包んだ、トーテム・ポールのような縦長の頭を持つ怪人——『
ウォッチャー・キング
皇魔王』が悠然と現れた。

『皇魔王』は、かつて大魔王が従えていた六将が1人——光滅の魔皇『ウォッチャー・キング』であり、確か数ヶ月前、大陸のどこかの冒険者がイベントを発生させ、それ以降から人類サイドに味方するようになったとか。

引き連れている配下は『NPC（プログラムによって行動が既定されているキャラ。YMRのシステムならワリとフリーダムな反応をする）』で、日輪を象った金色の錫杖をついているのは蛇髪の『
カルメン
土蛇族』、熱帯魚みたいにカラフルな鱗の半漁人っぽいヤツは『海
イーブ
鱗族』、虎縞の青い体毛に、三本の大きな犬歯を胸元まで伸ばしているのは『
ワスプ
獣牙族』——その他、人間種ではないバラエティ豊かな連中が、怪魚の口からゾロゾロ出て来る。

皇魔王がファルンに寄港するに当たって、ネット掲示板じゃ、ファルンの六将と一戦やらかすんじゃないかと盛り上がっているが、諸国を回遊し続けている行動の真意は未だ謎だ。

こうして見ると、前作からの引継ぎキャラも大勢いる。

種族の見本市みたいな場所だし、たぶん一日中見ても全然飽きないだろうが、残念ながら今は用事がある。

懐かしくて後ろ髪引かれる思いはあったか、俺はその場を後にした。

人だかりを抜けて埠頭の南端に着くと、海のように青い屋根が眺望できる『貸し倉庫街』へたどり着く。

物々しく重厚な兵装の騎士とゲートで監視している貸し倉庫街は、海商ギルドが一括管理しており、俺は受付で持ち主に賃金を振り込んだ。

自動振込みにしてもいいが、ギルドや貸し金の勧誘が鬱陶しいので遠慮している。

賃貸料は月に5万5000ボル。

けっこう……安くない出費だ。

だが、安場の倉庫では窃盗に遭うことも珍しくないし、これは必要経費だ。こんな治安の悪い……俺のような極悪PKがうろついている国では特に警戒が必要だ。

それに、ゲートを護る兵が世界最強の『ダチカン竜鬼兵』であるということを考えれば安いものだ。

ただの一兵で千もの兵と互角に戦える、海竜の最強軍団——『ダチカン』。俺も一度イベントで遭遇したことあるが眉唾ではない。いつだったか、緑青色のフルアーマーを着込んだ、戦車を彷彿とさせる超重装甲の騎士が一撃で戦況をひっくり返したのを見たことがある。

今思い返しても不思議だった。

ダチカンが放ったアレは何だったのか。

目の前で冒険者の一団が音も無く倒れた“アレ”は。

ま、そのうち自分の倉庫や自宅を持つことになるだろうが、今はそれにかかる費用を惜しんで、自分を徹底して鍛えるべきだ。

俺はキャラを巧みに操り、盗人やPK、宗教やギルドの勧誘者と距離をとりながら何事もなく街の外へと出た。

城下町とは対照的に緑が極端の少なくなる荒涼とした山岳地帯。ザラザラとした岩肌に沿って、なるべく強力な魔物が出没する場所へと向って歩いた。

昨日半日遊んで解った。

このゲームの性能は前作と比べ物にならないほど向上している。操作に慣れるにはまだまだ時間が掛かるだろうし、となると単独でパーティーをストーリーキングするにはリスクが大きいと思う。

ならば相手が多少高レベルでも構わない。包囲網を作れない単独プレイヤーを狙って自慢の脚でお宝の略取を狙う。ちまちま稼いで目を付けられるより、その方がよっぽど安全だしな。

そんなことを考えながら二時間ほど経っただろうか——目の前で突然声が響いた。

『あの、すみません!』

その声は個人宛ではない全体へのメッセージで寄せられたが、近くには俺しか居ないので声の主は当然俺に話しかけたことになる。

『すみません、誰かいますか!』

『……はい!』

俺は不審に思いながらもつい好奇心に負け、声の元を探って林の方へ踏み入った。

枝葉の少ない細い木々が高くそびえ、その狭い間を数十も歩かな

い内、急に視界が開けた場所に出る——とそこには、沸騰したように泡立つドス黒い沼地が視界一面に広がっていた。

ボコボコボコ……ボッコチャン……！

『……えっ？』

今ボッコちゃんて……？

いや、そんなことより、タールのようにネットリとした真っ黒な沼地の淵に、白銀の鎧を纏った屈強そうな神騎士がうつぶせに倒れてることの方が問題だ！

何やってんだこいつ？

身動き……取れないのか？

手足をカサカサさせてたから一瞬、白いGかと思った。俺は頭の上に疑問符を浮かべつつ白銀の神騎士に近づいてみる。

『あのー、なにかありました？』

『よかった！ す、すいません、その……なんか黒い場所を通ったら急に倒れちゃって。ずっと動けないんです』

『……』

神騎士がウンウン唸りながら言った”黒い場所”とは、マヒの沼のことだ。短時間なら問題ないが、長時間ガスを浴びると文字通りマヒ状態に陥る。

神騎士と言えば、俺の扱っている騎士の最高ランクに称された伝説のジョブで、おまけに、身に着ける装備の数々は一見するだけで解るくらいの超レアモノ。以上の外観から判断するに、目の前の神騎士は超上級者のはず。

でも、神騎士クラスでマヒの沼に引っかかる奴なんて嘘でも聞いたことない。マヒの沼とはそのぐらい初歩的なトラップなんだ。説明書にだって回避方法やマヒを受けたあとの対処法がいくつも書き連ねている。

たぶんコイツは、かなりやりこんでいる常連の誰かからキャラク

ターを受け継いだばかりの……初心者だろうな。

『すいません!』

『あ、はい』

『もう二時間もここにいます。これって機械の故障とかでしょうか……? お兄ちゃんが留守の間にパソコンをいじってたらかんなことになって……』

『それは大変ですね』

俺は相槌を打ちながら、倒れて動けないでいる神騎士の前でおもむろにしゃがみ、ガスを浴びすぎないよう気を配りながら装備品の物色を開始した。

『ちょ、ちよつと! なにをしているんですか!?!』

神騎士はびっくりして必死に身をよじる。

まあ無理もない。

救いの主が追いはぎを始めたのだから無理もない。

ま、だけど初心者には親切にすべきだ。

俺はその精神に則って一応答えてやる。

『うん、窃盗』

『な……!?!』

酷薄な言葉に神騎士は息を詰まらせ言葉を失うが、そんな反応されても一向にかまわない冷酷無比な——ある意味、ゲームとして正しく外道キャラになりきっている俺は、興奮する気持ちを抑えられず、とにかく片っ端からアイテムウインドウにお宝を移動させ続ける。

画面の右隅に映るマップを見ても近くには誰も居ないし、超豪華なお宝を余裕で独り占め。宝クジにでも当選したような絶頂気分だ。
『やめてください! これ、お兄ちゃんの勝手に使ってるだけで、私のじゃないの! お願い!』

『あ、そう? じゃあ、お兄さんが悪いよ。パスワードの管理に不備があったんだ。ま、お兄さんが間抜けだったということだ』

『本当にお願ひ! やめて! だれか! だれか——っ!』

『無理無理。いくら大声で話しかけてもマップ上に誰も映ってなきゃ絶対に届かないって。悪いけど、こういうのもゲームの内だからさ』

『……』

神騎士はあきらめたのか、返事をしなくなった。

気の毒ではあるが、悪いとは思ってないしやめる気もない。

ハハッ、こんな楽なハイエナは初めてだ！

意気込んでキャラを強化した甲斐が無いってものだね。

現実世界の俺は椅子のリクライニングを利かせながら缶コーヒを啜る。余裕たっぷりのクソガキっぷりである。

だが俺は忘れていた。

あまりの幸運に気を取られ周囲の警戒を怠った。

長いブランクの所為か……忘れていた。

ルール無用のこの世界では、ほんの些細な油断が命取りに繋がるということパーフェクトに忘れていた。

突如、画面上の右隅から蜂の巣突付いたように増大する赤の光点。それも1つや2つなどではない。10以上もの大群。それは出現と同時に一直線にこちらに進路を向けた。

赤色の表示。

それは俺の御同業……頻繁に”PK”を行うプレイヤーを意味していた。

『な……やっべ!?!』

気付いたときにはすでに遅い。

俺と神騎士を囲む敵の包围網はきっちりと組み上がっていた。

【暗黒司教】
あんこくしきょう

Lv3650

初期の修道士からカルマを重ね闇属性に転じると、魔神崇拜を教

義とする闇の司祭となる。

魔神の加護によるステータス補正。

攻撃魔導に長けた魔術のスペシャリスト。

司教クラスへの転職は信徒の投票によって選任されるので非常に難易度が高い。

【邪覇剣士^{じゃはけんし}】

LV1570

LV270

中級レベルの魔王を単独撃破した者にだけ与えられる特殊ジョブ。
呪われた全ての武具が装備可能。

騎士系では神騎士と双璧を成す剣士の最高峰。

【竜調教師^{ダイナソー・マスター}】

LV1230

LV911

LV822

ドラゴンを操り敵と戦うトレーナー系のジョブ。

調教したドラゴンは種類によって騎乗も可能となる。

ドラゴンはモンスターの中でも最大クラスのステータスを誇るが、育成に掛かる莫大なコストの高さから上級者向け——貴族の職業とも呼ばれている。

調教中のドラゴンに食い殺されたり、逃げられたり、盗賊に奪われたりとリスクも高く、一体の竜を成竜にするまでに最低5千万ボルから500億ボル以上（100ボル＝1円）も掛かる。調教済みの成竜は非常に高値で取引されるため、投資としてこの職業を選ぶ者もいる。

【ハイ・エルフ】

LV1418

L v 1 1 0 3

L v 8 5 4

L v 6 4 5

L v 8 8 8

銃や弓矢などの軽量の飛び道具を得意とし、補助系魔法とスピードに長け汎用性が高いジョブ。

ハイ・エルフでパーティーを組むと大きな加護を得る。同族の数に比例してHPの増大、MPが少量ずつ回復、ラック上昇、経験値アップ、甦生率アップなどのプラス属性が付加される。

『……囲まれたか』

俺は表向き取り乱さなかったが、内心ではかなり動揺していた。

連中はゆっくりと確実に包囲を狭めて来ている。

まるで遊んでいるよう。

俺の貧弱な装備を見て、もしくは能力値を魔法で確認して、連中はさぞかし見下しているだろう。

だが……舐めるな。

レベルの差や装備の差が勝敗を左右したのは前時代のこと。互いに向き合って立ち止まり、HPの削り合いで勝敗が決したのは前時代こと。

たとえば身体能力は未熟なれど、極限まで鍛え上げたプログラミング技術と操作技術は圧倒的物量差をも撥ね返す力となる。

『死ねやハイエナ野郎!!』

リーダー格っぽい暗黒司教が振りかざした号令の下、統制の執れた横一列で一斉に射撃を開始したハイ・エルフの射手。飛び道具を得意とする奴らハイ・エルフは30mほどの長距離からでも正確無比に矢玉を放って来る。

いくら何でもその距離で当たるかよ。

林の隙間を狙って雨あられと降り注ぐ矢を軽く避け、俺は射線をずらしながら、さらに視界の悪い森林の中へと逃げ込む。

踵を返す直前にチラッと見えた。

白銀の神騎士——いや、装備全部取っ払ったからパンイチのノーマルか。白ブリーフ一丁のそいつが邪覇剣士に黒刀を突き立てられ、きっちり止め刺されるのが見えた。

連中はすぐに俺を捕捉してきた。

竜調教師が解き放つ小型のドラゴン二頭が左右に散開して挟撃を仕掛けてくるが、俺の脚がそれをさせない。左右に大きく膨らんだ敵の包囲網を鍛え上げた鬼脚でグングン引き離す。

俺の脚に追いつけず、近距離視認用マップ上から敵の後続が次々に消えていく。

『この野郎！ アイテム置いてけや！！』

『それ、いくらすっと思ってるんだ！』

特に厄介なのはハイ・エルフのスナイプ野郎。とにかく脚が速くて、追いつかれこそしないものの引き離せない。遭遇した戦闘中のパーティーに突っ込んだり、モンスターの群れに突っ込んだりしてなんとか撒こうとするも、一定の距離を維持され追跡を振り切れない。

徒党を組み、略奪を生業とするプロの狩人ども。

腕はそれなりに……ということか。

仕方ねえ。まずスナイプ野郎どもを個別に叩く。

俺は後続を十分引き離したことを確認し、方向転換して横道に逸れた。一直線に、光の射す森の外へと向かう。

『なる、逃がさねえ！』

『戴きます』

俺が横に移動したロスの方だけ一気に距離を詰められる。だが、

横一列に並んでいた連中は射線上に一部仲間を配してしまうために弾幕が薄くなる。

列が整う数秒の間に俺は体勢を整え、正確に狙って来た左翼からの狙撃を、大技『土下眠・ローリング』にて緊急回避。『わーい』と言いながら敵の懐深くに転がり込み、立ち上がると同時に、右端に位置するハイ・エルフ手首を掴んだ。

『わ、わ！！』

完全に不意を衝かれ、驚愕した顔で握られた手を引くハイ・エルフ。その反応を読んでいた俺は、その動きに応じて、柔術でいうところの”崩し”を仕掛ける。

クンッ

力の流れに逆らわず相手の懐に飛び込み、関節を極めた手首を捻って体を崩し、頭から地面に叩き落とす。

完璧なタイミングで入った”崩し”によって、ハイ・エルフは首からゴキッと小気味のよい音を響かせた。これぞ相手の引く力や押す力を利用した『柔』。

俺は起き上がろうとするハイ・エルフの胸板をおもいつき蹴り飛ばし、即座に馬乗りになる。見下ろし型の視点をワンクリックでキャラの視点に合わせ、喉元にナイフを突き立て『カット・スロー』。

『一撃必殺』成立である。

1ケタLvのカスプレイヤーが、100倍以上もの力量差を埋めたその事実を目の当たりにし、PKグループを取り巻く風に変化が起こった。子鼠を追い立てるようなハイ・エルフどもの拙速な陣形は警戒に歩を緩め、俺とわずかに距離を置く形で停止する。

『ほう、『やわら』を使いおるか……』

ハイ・エルフの1人に年寄りじみた言葉で感心された。
律儀な俺は言い返してやる。

『まあな』

まだまだこれからだ。

後続が追いつく前にコイツら全員仕留める。

完殺する。その自信はあるんだ。

Lvを上げることによって身体能力は向上するが、肉体そのものの強度は基本的に1と100のLv差があらうと大差ないのだ。防具の隙間から急所を突けば、種族や個体差は勿論あるだろうが、相手は確実に死ぬ。三寸斬り込めば人は死ぬのだ。

そのため、冒険者は優れた武具を求める傾向が強い。この世界での武器防具の地位は想像以上に高く、現実の金銭を用いた高額でのやりとりも珍しくない。小銭欲しさに俺が外道プレイヤーになるのも無理からぬこと。

俺は横目で、緑色のラインで示されるバイタルの具合を見てからフツと息を吐き、”キャラの心肺”を整えると、血塗れのナイフを逆手に持ち替え、ハイ・エルフ達に襲い掛かった。

『目潰しダブル!!』

『ぐわッ!? き、汚エぞッ!?』

俺は地面の土をすくって手近の連中に投げ掛けた。目潰しを食らった敵は顔を覆ってもがき苦しむ。

『よっ!!』

眼を覆うハイ・エルフBの手首を素早く掴み、グツと引き寄せてから肘が反り返るような逆関節に極め、そのまま背負い投げで頭から落とす。

『シッ!!』

地面に落ちる寸前の頭を狙い済まし、ナタを振り下ろすかのような切れ味のロー（下段蹴り）で無防備な頭部を蹴撃。

ビッキイツ！！

『ガッ！？』

ハイ・エルフBの頭部が弾け飛んだかのようにブレた。

これぞ陸奥千年が成せる奥義……『雷』^{いかづち}！！

普通に硬い地面に落とした方がダメージでかくねとかいうツッコミはさておき必殺の一撃。防具に護られてない頭部——頸椎へのダメージを狙い打った完璧なクリティカル！！——だったが、高等種族の持つ肉体の基本スペックの差はやはり埋め難く、この打撃を以ってしても致命にはだいぶ足りない。

『くう……こ、この程度で参るとでも思ったかよ！！』

『思わない』

簡単に倒れてはくれない。

前回から次いで戦っている俺はそれを充分承知している。

俺は起き上がりを狙って、ハイ・エルフBの鼻面に、全体重掛けた膝小僧を叩き込んだ。

『ぶはっ！？』

膝の直撃を喰らったハイ・エルフBの顎先が撥ね上がり、一瞬視界が泳いだ。俺はその隙を狙って胴タックルからテイクダウンし、素早く背後を取る。

『ほいつ、頸動脈いただき！』

ハイ・エルフBの後頭部に添えた手を前に押し出し、首筋に刃物を這わせる。一般に、首を掻き切るときは後ろに反らせるのではなく前に倒す方がより効果的で、YMRの驚異的な物理エンジンはその効果までも読み取るのだ。

パツクリと開いた首筋から水鉄砲のように赤い筋が噴き出し、『一撃必殺』を認定されたハイ・エルフBの体は俺の手の中でビクンビクンと跳ね上がった。

【ファルン王国・王宮灰色の尖塔・隠し執務室】

ワールドマップ上の端の端、大陸より南東に位置する島国――『ファルン王国』。

逆賊の謀反によって国主を討たれ、その後は落日を見るが如く果て無き衰退の一途を辿っていた。

前王の死後、恩赦により牢獄に繋がれていた多くの罪人は野に放たれ、徒党を組み再犯に精を出している。

治世は乱れ、人心は腐敗し、人口は瞬く間に半数以下の24万人にまで減少。重税に略奪。金子によって判決が左右する不当な裁判。新天地を求めサーバーを移る者が日に数百人以上。それも日に日に増え、人口減少の傾向は天井知らず。そしてそれは、堅牢なる城壁に護られた城内でも同じであった。

暴徒に金品を持ち出され壁紙まで剥がされ、瓦礫と埃にまみれた兵どもの夢跡のごとく荒れ果てた城内の一角では、いまだ平和への願いを捨てきれず孤軍奮闘する数名の義士らが集っていた。

エルメスである。

ザクタンクである。

ギボである。

彼女ら三人は、ある目的でこの国の中枢に根を張っていた。

王が謀殺された直後に発生した大暴動。その混乱にまぎれ謁見のチャンスを手に入れた彼女らは新王ノックに能力を買われ、即行で国外脱出を果たした政治屋の代わりに即日要職へと駆け上る。

過程はともかく形だけ大臣となった三人。

課せられた初仕事は数万数十万とも推定される暴徒の鎮圧。

密約により強力な私兵を擁する海商王を動かし、祭りに参加したがる兵をアメとムチで統制し、アホな国王を丸め込んで事態を上手く収めた彼女達は今、城に併設された螺旋階段が続く塔の五階、数人どうにか立って居られる程度の狭い隠し部屋に一同は介していた。姿かたちは見えない。

代わりに部屋の中央を占拠するのは、小汚い頑丈そうな丸机の上にメロンほどの水晶球が三つ。水晶の中にはぼんやりとゆらめく人型の映像だけが浮かんでいる。

それは映像と音声を伝達できる”風巻きの魔導球”。

十段階に設定されているレア度で八を数える密談用のアイテム。たがいが認証しなければたとえ部屋の真ん中で聞き耳を立てようと、いかなる魔導や道具を用いても音声映像は他に漏れることはない。

エルメス『なんかヤバイですね、この国』

ザクタンク『海外のBBSでも凄い盛り上がってましたよ。……史上最悪の”暴君”って、ゲーム雑誌の『死ぬこの野郎 読者が選ぶ最悪プレイヤーランキング』にも入ってるし』

エルメス『城で働いていた人もだいぶ少なくなっちゃって、ずいぶん寂しくなりましたね。公園広場で革命の集いを宣言する張出しがありましたけど、どうせあれも鎮圧されるんでしょうねえ』

ザクタンク『アイツらがいますからね。国王直属の最強十二の円卓の騎士!! なんて聴こえはいいですが、ノック王が”エドの祠

”の独占探索権を与え飼いならした無頼者の集まりでしかない』

エルメス『王様が率先して賄賂やってんですから、みんな上に倣っちゃって。いま行政に残ってるのは利権絡みで懷を潤す狒々どもしかいない』

ザクタンク『由々しいですな』

エルメス『いやいや、まったく』

ザクタンク『でも王様が流入者をカットしたお陰でサーバー全体が軽くなった感じがするのはいいですね』

エルメス『鬱陶しい勧誘の類もだいぶ減りましたし、探索者の大幅加入でダブっていたレアアイテムの貿易赤字も市場が安定して、来期は黒字に戻りそうですし』

ザクタンク『まさか、狙ってやったとか……?』

エルメス『ないない。それは無いですよ。今回は偶然がたまたま重

なっただけです。この先はもっと混乱しますよ』
ザクタンク『ハハ、そうですね』

ギボ『ちよつと！　いつまでも油売ってないで仕事してよ！』

ザクタンク『おつと。やれやれ、うるさいのが来た。じゃ、そろそろ始めますかな、内務大臣殿』

エルメス『はいはい、行政大臣殿』

ギボ『えー、今回はちよつと厄介な相談です。フィールド上で装備品をPKプレイヤーに略取されたそうなんです、何でも持ち主に無断で使用したキャラだったそうで、被害者は装備品の返還を求めているんです』

ザクタンク『一部地区を除いて、この国ではアイテムの奪い合いを認めている。……まあ推奨はしていないが、べつに法に反してはいないだろ？　何故そんな話を？』

ギボ『そうなんですけどね。盗られたって装備品が、その……非常に高額なんです。闇値（リアルでの売値）。世界的に人気を博しているYMR世界で出現するレアアイテムや貨幣は現実でも高価で取引され、その儲けを専門に狙った略奪者や商人がYMR世界に多数存在し、しばしば問題になっている。YMRを企画したイギリス企業ヴェイン株式会社はプレイヤー達に厳重な注意を勧告しているが法的強制力は未だに無いため、実際では野放しになっているのが現状である）で二千万……』

ザクタンク『え……二千万？　それ……マジ？』

ギボ『マジです』

エルメス『ちよつと、いったい何のアイテムです？　尋常な金額じゃありませんよ！？』

ギボ『前々回のYMRで猛威を振るっていた魔王四將軍の1人、『バヂッド』が所有していた、“バヂッドの玉兇器”です。特殊効果は全魔法完全無効化』

ザクタンク『世界に一個しかない超レアアイテム？ それも2期前の？ すげえの持ってたなあ。宮仕えには一生お眼にかかれないモンだね。いやしかし、そんな大金出して買う人がいるとはね……』エルメス『でも実際売れるんですよ。1円を盗んでも100万円を盗んでも泥棒は泥棒……なんて言いますけど、やはり1円の盗人相手に司法は動かないですよね？ 現金なもので。でも千万単位となればもう、我々が介入すべき問題です。変に噂が広がって上へ下へと大騒ぎ立てられる前に、ここはそのラッキーな盗人さんを召喚して穏便に返してもらいますか？ まあ、国庫からいくらか親切に對する報奨金を出すということだ』

ギボ『そんな悠長なことで大丈夫ですか？ 取引される前に軍を動かして捕縛しましょうよ！ いますぐ！』

ザクタンク『あんまり無茶やったら、ますます人口が減ってしまいわないか？』

ギボ『だからっ、悠長なことを言っている間に……！』

エルメス『金額の多寡に眼を奪われて僕達が規律を乱すわけにもいかないでしょう。僕達はあくまで第三者、中立な立場で物事を裁かなければなりません。軍は動かしません。当然でしょ？ とにかく使者を出して返還を呼びかけましょう』

ザクタンク『ま、妥当ですか』

ギボ『……そ、そんなんだからッ！！ 後でどうなっても知りませんよ！』

ザクタンク『おやおや、怒らせてしまいましたな』

エルメス『この件は僕に一任してくれませんか？ 迷惑はかけませんから』

ギボ『……物好き』

立ち去ったはずのギボが戻って来た。

因果応報ハイエナ稼業

【ファルン王国・荒野のフィールド】

『ふう……』

ハイ・エルフの一团をどうにか始末した俺は一息吐く。

肌着程度しか身に着けていない俺のタクじゃ、まともに攻撃を受けたら即死だったろうが、遠距離攻撃に特化したハイ・エルフ達は接近戦が不得手だと踏み、徹底したイン・ファイトで“一撃必殺”を狙った。

肌が触れ合うような距離から複数を相手に大立ち回り。

数分後には喉を掻き切られた死体が五つ。

俺はほぼ無傷だった。

『……………』

マップで周囲に敵の気配が無いのを確認し、乾いた赤土の上に横たわる死体からアイテムを回収するべく動く——突然、青紫色の無数の光輪が死体の前で噴き上がった。

『な……ん！？』

突然のことに俺は息を呑む。

光輪の中から徐々に人の輪郭が浮かび上がり、光の輪が粒子となつて大気に溶けると、その中から出て来たのは……先ほどの”PK”ども。

竜調教師や邪覇剣士。

そして……暗黒司教。

『キョラキョラキョラ……！！ 逃げられませんよ……この包囲からはね。そして、この『DEATH』……からはね！！』

暗黒司教が妙に皺枯れた声で俺に凄んだ。

厚く丈の長い丈夫そうな灰色のフードを目深に被り、青白い、細枝のような腕に幾つもの宝石を誂えた金の腕輪をジャラジャラとさせ、暗黒司教『DEATH』は一斉に仲間を解き放った。

迅い!!

俺が身構えるよりも早く、一瞬にして視界から掻き消えた邪覇剣士二人が背後に回った。必死に逃げようと振り返るも、こちらの動きを予期していたかのように肩口に黒刀を突きつけられそれを封じられる。

『パーティー登録した人間とは、どこにいても”ポータル”で合流出来る……なんて初歩的なこと、寂しい寂しい単独プレイじゃ知らなかったかい?』

『……くっ!』

邪覇剣士の1人が下卑た笑いを浮かべた。

魔法やアイテムでパーティーが合流出来ることは知ってる。

だが逃げるのに必死で全然思いつかばなかった。

どこを見ても敵、敵、敵、敵。絶体絶命のピンチだ。

どうあがいても逃げられる隙など見当たらない。

『——ち、畜生ッッ!』

イチかバチか、俺は転送ポータルの巻物をアイテムソケットから引っ張り出し、街への帰還を試みた——が、地面に放り投げた巻物が青紫色の光輪を浮かべた瞬間、何故かそれは光の粒となって掻き消えてしまった。

『??. な、なん……?』

驚愕に言葉を失ったその直後、DEATHの放った召喚魔導——

『三つ首雷竜の紫電』ドライゼン・スベル・ヴェノムが俺を一瞬にして焼き焦がした。

暗転。

災い転じてハイエナ稼業

「クソッ！」

現実世界の俺は机を強打した。

やられた。完全にやられた。

死体に重なるように表示されたダイヤルログの『街へ戻りますか？』のYES／NOに従い、俺は半強制的に初期転送ポイントまで戻される。

奪い取ったアイテムがなんたるかをじっくり見る前に狩り殺されてしまった。クズどものアイテムなど物色せず、さっさと逃げていれば……多分逃げ切れた。

痛恨のミスだ。

所持金0、経験値0、フィールドにブチ撒けたアイテムと装備品は今頃連中に物色されているだろう。

「……て、あれ？」

ふと……俺はPC画面上に映るタクを見て眼を疑った。

外装に変化がないのだ。

ちゃんと衣服を纏いナイフを所持している。

びっくりしてステータス画面を開くと、そこには——高いレア度を示す緑や黄色表示のアイテムがズラリ。

【バチッドの玉兎器】——レア度10

旧・人魔大戦で、人類側を恐怖に陥れた焰の魔王バチッドが持つ、魔法完全無効化能力を秘めた碧の卵。

【邪神の籠手】——レア度9

聖神の雷により朽ちた古き邪神の腕。

常時8倍プロテクト。

最速クイック攻撃が可能。

【魔神の首飾り】——レア度9

異界神の黒き血、デモン・ブラッドの力を内に秘めた首飾り。

HPとMPの半分を消費して異世界より訪れし七の魔人のいずれかを召還する。

防御力三倍。

食事を摂らなくともステータスが減少しない。

凍結無効化。

【ガイナス・ヘルム】——レア度8

大陸を制覇した伝説の霸王『ガイナス・ラグルド』が頭上に頂く漆黒の兜。

イノセンス上昇。

ステータス正常のまま常にバーサク状態。

絶対の確率で物理攻撃カウンター。

85%の確率で魔法反射。

【デモン・プレート】——レア度8

地獄の業火によって鍛え上げられた白銀の鎧。

アイテム出現率70%上昇。

蘇生全回復確率80%。

ステータスや所持品を丸裸にされる『調査』^{アンスー}を防ぐ。

【死海の宝玉】——レア度6

持つだけで幸せになる、深海微生物の集合体が化石化した白い宝玉。

ラック上昇40%。

50%の確率でステータス異常回復。

そして、所持金235ボル。

「……………」

俺は、しばらく呆然としていたと思う。

心臓がぼくぼく鳴る。

キーボードを打つ指先が震えて止まらない。

死亡したにもかかわらず何のペナルティも貰わなかった不可解な現象は置いといて、見たことも無いようなレア度の武器、防具、装飾品がアイテムソケットいっぱい収まっている。

「やべえ、やべえよ……これはやばい……」

頭が混乱してきた。息は切れ、脈拍は定まらず、自然と、ひと気の無い場所へと足が向う。

何だか周りの人間全てが敵に見えた。

【護りのタリスマン】——レア度5

アイテムソケットに入れて置けば、死亡時のペナルティ帳消しと引き換えに消滅する。

死神の黒き三日月

YMRの世界は既存のオンラインRPGとは一線を画す、明確なエンディングが設けられたゲームだった。世界を支配する魔王を倒せばゲームはその時点で終了し、システムを刷新した次代のYMRへと移り変わる。

前回のYMRで世界を支配していた魔王『ヴィルザーク』は、討伐までにおよそ六年半掛かり、優勝したチームには次期YMR世界での様々な特権の他、賞金2億ドル——現在の日本の貨幣価値にして200億近い金額が褒賞として与えられた。賞金が高額なために優勝者の名前は希望により伏せられたが、そのチームの中には日本人の存在が確認されたと、今でもまことしやかに囁かれている。

【ファルン島西部・ケイン活火山八合目・隠者宅】

冒険RPGであるYMR内で作家として活動する男がいた。

その名も『武富士』。

YMRの窓口は想像以上に広く、馬鹿正直に冒険するプレイヤー以外にも、地味に盆栽育てたり、養鯉に奔ったり、学校に通って夜の校舎窓ガラス壊して回る退廃的日々だって送れる。武富士はそんな世界で文学に没頭していた。

何度かの失敗の後に自身の小説がそこそこヒット、今では悠々自適な暮らしを送る武富士。静寂を好む彼は王都から距離を置き、ファルン島内の山岳地帯を拠点とする魔王——焰産みの巨王『アルム・ガラム』の根城の真下に居を構えていた。

公式によると、『アルム・ガラム』の全長は1万4800m。巨王の二つ名に恥じぬ、常識の域を遥かに超えたその全容は未だようと知れず、岩盤のような岩肌の隙間から噴煙と劫火を撒き散らし、大陸から集った2千人規模の大パーティを一夜にして壊滅状態に陥れた事件は、プレイヤー達にとって記憶に新しい。

開始一年足らずの今現在では誰1人として『アルム・ガラム』には対抗できなかった。魔王戦での死亡ペナルティが『レベル半減』という厳しい現実もあって、ケイン活火山付近で人を見かけることは極めて少ない。

少ないが……ゼロでもなかった。

ランタンの灯りを頼りに、山の中腹に隠された洞窟の奥へ奥へと進むと……鍾乳洞のような雰囲気をした広い空間に出た。

フットサルのフィールドくらいの広さはあるだろうか、吸い込まれてしまいそうなほど高い天井には、今にも降り注いできそうな満点の星が瞬いている。

空間は何らかの力が働いているようで、完全に正常に保たれ、山を登ったことによる軽い低酸素症の『異常』バッド・ステータスが安定域にまで戻って来ている。

ひと心地ついて星の美しさにひと時心奪われていると、奥の方のロッジから黒衣を纏った長身の男が現れた。

『やあ……キミか、めずらしいじゃないか』

『ひさしぶりだね』

抑揚の無い声で出迎えてくれたのは、”仮面ライダー”のような風貌の男であった。

闇色のマントに身を包み、何かの昆虫を模した漆黒の仮面を被っている。もしこんな街中で見かけたら、後ろからポンと肩を叩いて「らいだ」——と言っても許されるくらいライダーだ。

彼こそが武富士。

かつて共に魔王を討ち倒した伝説の8人の内の1人で、そのときは『レイク』と名乗っていたが、現在は『武富士』と改名したそう
な。

神聖魔導を極めし『大司祭』であつたレイクは、普段ほのぼのしていながら、いざ戦闘になると誰よりもダーティーな攻撃を仕掛ける熱い男で、近接戦闘に向かない補助系のキャラで、攻撃力耐久力ともに最強クラスのヘビーモスを相手に掴み合つて殴り合うような男だつた。

『この空間は面白いね。一体どうやってるんだい？』

『研究で半永久的に続く魔導構成を生み出した。この空間総てが共生関係にあり互いが必要不可欠な要素でサイクルしている』

『へえ！ 僕の家でもできるかな？』

『この場所限定だね。これ以上でもこれ以下でも駄目。何かが欠けたり混じると永久の機能は失われてしまうんだ』

『そうか。残念』

魔法は既存の系統付けられたものから、組み合わせで新たに生み出すものがある。プログラムを組む膨大な量の専門知識と構成セン

入りが問われるため、素人が簡単に手を出せる領域ではない。

入り口は広く奥は限りなく細い。

YMRの世界は日々変化する第二の現実なのだ。

洞窟の奥の部屋へ案内されると、そこは足の踏み場もないほど山積みとなつた旧世代の高位魔術書や怪しげな民芸品、未踏ダンジョンの手描き地図を丸めた物などに囲まれていた。

アルコールランプに熱せられた机の上の試験管やビーカーの中には、何か判らない蛍光色の液体が煮詰められているし、天井には『スカイ・フィッシュ』らしき骨格標本が針金で吊り下げられている。

『悪い悪い。今片付けるから』

バツの悪そうな感じでそう言つた武富士は、机の上の荷物を手早くまとめてそこら辺に放つた。

今放り投げた中にすごく貴重なアイテムがあつたような気がしたが……とりあえず促されるまま席に座り、武富士も足で周りのゴミを退かしながら対面の椅子に座つた。

『相変わらずだな。本業はどうした？』

『それはそれ、これはこれ。物書きは多趣味なのさ』

『まあいい。武富士、急な話だが預けていたモノを返して貰えるかな？』

『……”死神の黒き三日月”か』

ナンバー・サード・デス・サイズ

武富士は嫌なものを思い返すように言い淀んだ。

開始から数十年を経て、参加プレイヤー2億8千万人を数え、なおも爆発的な増大を続けるYMR。その広大な世界で幻と噂されている十二神器の1つ——それが『死神の黒き三日月』だった。

魂を刈り取る漆黒の大三日月。

この神器によって魂を奪われたプレイヤーは半永久的に甦生不能に陥り、使用しているキャラクターは二度とオンラインで使用できなくなる。それは事実上、プレイヤーを強制的にアカウント停止に追い込める、課金制オンラインゲームの常識枠を大きく超越した、世界のバランスすら破壊しかねない悪魔の大鎌と云えた。

『封印を解く気か？　こんな危なっかしいモノは使いたくないからと言って……だから私に預けたんだろう？』

『1人……消えて貰わなければならぬ』

『だからと言って……それは間違いだ。こんなのは良くない。違うか？』

『その通り。だから、限定1人だけを即座に抹消する。そうしたら元通り封印するよ』

『……………』

『決断ができないなら勝手に持って行くよ。あれは元々、僕のモノだからな』

『影走……』

エイソウ

『今は”エルメス”と呼んでくれよ』

追い詰められてハイエナ稼業

【ファルン王都・城下街】

俺はプレイヤーの誰も彼もが自分を狙っているという疑心暗鬼に駆られ、大量のレアアイテムを抱えたまま城壁の外れまで来ていた。小一時間前のこと。

復活先の役場でお宝の無事を確認した俺は、動揺していたこともあって、落ち着くためにひとまずロフオフしようと思った。一階へ降りて、ロフオフ・ポイントである公衆電話の受話器に手を掛けると――そこでいきなり「あ、こいつ知ってるぞ！ 賞金首・ハイエナのタクだ！！」と――受付けに並んでた『^{ゴッド・チャイルド}宣教師』に指差される。

『何イ！？』

『お尋ねモンかッ！！』

受話器を持ったまま嘔然とする俺に対し、その場にいた警備員や賞金稼ぎや善意の第三者はいっせいに得物を抜き、取り囲んで来た。詰んだ……！！？

頭が完全に真っ白になって、さすがに終わったと死を覚悟した次の瞬間――『待て』と、男の声がした。

人垣を押し割って前に出た男は、上半身裸で浅黒い肌をした、タバンを目深に巻く、少年のような小男だった。

『おお、マイン・コア……！！』

『”マイン・コアの戟”^{ゲキ}か！！』

誰それ？

とは言い難い状況なので固唾を飲む。

『せ、説明するぞ……！！”五核使い”のマイン・コアとは、地・水・火・風の四大精霊元素を魔鉄芯に込めて使う死神じゃ。鉄の杭で一度刺され、二度刺され、三度刺され、四度となるともう詰み……。最後の五本目を打ち込まれたとき、如何なる生物であろうと耐え切れん。五本目の起爆芯が打ち込まれれば、それによって、既に

打ち込まれた四大元素の芯核が連鎖反応して内部から超爆発を起こす。確実に死に至るのじゃあー!!」

『おおー!』

『それはすごい!』

隣に立っていたジジイが解説している間に脱出する俺。

よく訓練された冒険者達がノリノリで話しに食い付いてくれたお陰でギリギリ脱出できた。ジジイの言うことは結局よく解らなかったが、マイン・コアとやらの能力は要するに、ワリのいい『スカーレット・ニードル』(蠍の一刺し。十五回刺すと相手死ぬ。死ぬかも知れない)のようなモンか。

でも自業自得とは云え、お尋ね者の手配書きが最悪のタイミングでボディーブローを打ってきやがった。あの”宣教師(カツパ野郎)”……今度遭ったら後ろから浣腸エクセレントだ。

何とか路地裏へと逃げ込んだ俺は、壁を背に暗がりです息を殺し、追っ手の連中が通り過ぎるのをジッと待った。

P Kプレイは所詮血塗られた道だ。

まともに表も歩けなくなってしまった。

こうなる前にもっとL Vを上げときたかったんだが。

『居たか!?』

『いや……だが、こっちで見かけた! アイツ、ヒョロそうなのに逃げ足が早いぞ!』

『人が多過ぎてマップじゃ見分けが付かん……』

地鳴りのような足音が通り過ぎ、辺りがシンと静まり返るを待って、気配が完全に消えたのを確認した俺は……ようやく大きな息を吐き、その場にズルズルと崩れ落ちた。

『ふう……』

マジで終わったかと思った。

これからどうする?

一番安全なのはログオフしちまうことだが、めばしいログオフ・ポイントはPKグループが既に押さえているだろうし、神騎士が保険に加入していれば”取立て屋”が動き始めているだろうし、神騎士がPKグループが役場に訴えて賞金額を吊り上げれば、追跡の手をさらに増やすことだってできる。

宿屋、マンション、教会、酒場、スポーツガーデン、電話ボックス……ログオフ・ポイントは探せばまだまだたくさんあるが、どれも街の中心にあって人通りが途切れることはない。

もう捨て値でもかまわないから手っ取り早く売り払おうとも考えたが、近くの専門店がギルド加入店ばかりで盗品は扱ってないし、露天やモグリの類に当たれば殺されて奪われるのがオチ。仲介を頼もうにも知り合いなんかいねえ。

俺みたいな貧相な外見の騎士に『調査』^{アススー}を仕掛ける酔狂は居ないだろうが、はつきり言って怖エエ。

そんな次第で……逃げた先が城壁の外れ。

あんな恐怖は初めてだ。

俺はウンウン悩みながら城壁の周りを一時間くらいウロついている。

どうしようか……。

そのうち1つの案を思いついた。

このままじゃ逃げられない。

逃げられないなら、何処かに”隠しちゃう”か……と云う考えに至る。

後で思い返せば愚策中の愚策なのだが、追い詰められた人間というのは、たとえどんな小さな光にでも希望を見出してしまうモノなのだ。

そんなわけで俺は行動を開始した。

とりあえず、追っ手が一番待ち構えていそうな城門を上手く抜けるために外装を変える。この島のネイティブである『タンタナ族』に偽装することにした。連中は数が多いし面を着ける風習があるので紛れ込み易いだろう。

まずは全裸になる。

と言っても、ゲームの仕様でトランクス一丁までが限界だが。

泥水を全身に擦り付け、砂地でゴロゴロ転がり肌全体を白いキャンパスに変え、花を挿り潰して赤い染料を作り、それを肌に塗る。それから熱帯樹に登って、グローブのように大きな葉を数枚失敬して腰ミノにし、最後の一枚は覗き穴を開けて面にした。

『よし、カモフラージュ率100%』

一部の隙も無い偽装に満足いった俺は、腰ミノ一丁の半裸の状態で木陰に隠れ、お目当ての”タンタナ族”の一団が現れるのをジッと待った。

六時間後。

『来たあああッッッ!!』

俺は思わず絶叫して、慌てて口を塞ぐ。

夜陰にまぎれ、二十名ほどで列をなして城門へと向かうタンタナは、太鼓や笛の勇ましい音に鼓舞されるかのように雄叫びを上げ踊り狂っている。物質文明から遠ざかり、自然の木々や葉を衣装として身に纏う、太陽のような赤い肌を持つ勇猛果敢な種族タンタナ。

『ホウホウホウ! ホウホウホウホウ!』

『ホウホウ!! ホウホウ!』

——今だ!!

『ポウッ!』

俺は額に手を当てながら颯爽と立ち、重力を感じさせない巧みな

足捌きで滑るように後退しながら、さりげなく一団の最後尾に付く。

『ホウ？』

前を歩くタンタナが俺に気付く。

目ざといヤツだ。

『ポウッ！』

俺は突きつけるように顔を前に出した。

もう後戻りはできない。

『ホ、ホウ？』

『ポウポウポウ！！ ポオオオウッ！！』

『ホ……ホウホウ？』

タンタナじゃない俺には何言ってるのかさっぱり解らんが、とにかく『ポウポウ』叫んで強引にねじ込む。人差し指でタンタナの胸元を激しく突つきながら、怯むのも構わず一方的にまくし立てた。

『ポウポウ！ ポウ！』

『ポ……ポウ？』

『ポウ！ ポウポウ！』

『ポ………ポウ！』

『ポオッウ、ポウ！』

タンタナはちょっと釈然としない感じで首を傾げていたが、俺の必死な意気込みが伝わったのか、列に戻り再び雄叫びを上げ始める。列に戻ったタンタナが太鼓鳴らしているタンタナに、何勝手に”ポウポウ”言ってるやがんだこの野郎的な感じで頭を殴られたが、とりあえず華麗なる脱出に成功だ。

ファルン王国は大陸と比較すれば小国と云えるサーバーだが、それでも大体ハワイ諸島ぐらいの広さがある。誰にも知られていない未踏の場所もまだまだ沢山あるだろうし、そういった場所にこっそりアイテムを”放置”しておけば、万全とはいえないが、ひとまずは安心かも知れない。

どうするか……おそらく全部で十万円相当するだろうレアアイテムの山。フィールド上に放置などして大丈夫だろうか……悩む。苦悩する。だが時間もあまりない。

俺は決断した。

誰にも気付かれないよう痕跡を残さず、馬や騎竜などの足を借りず慎重に移動し、街から18kmほど先にある荒野に出現する『クアラ大湖』までたどり着くと、迷うことなく水の中へザブザブ踏み入り、腰の辺りまで進んでから、湖底にアイテムをそっと放った。

狩猟地から離れた辺鄙な場所。

フィールド上の10km前からは誰一人として遭わなかった。

これでとりあえず大丈夫だろうか。

この場所は俺しか知らない。

暗転でいいよな？

「ふう……」

無事ログオフして、俺は心底安堵の息を吐いた。手にじんわりと汗が滲んでいる。

略奪行為に関する何がしかの警告文がメールで送られていないか確認したが、特にそういう類のものは無かった。至って問題なし。

「なんだよ……脅かしやがって」

結構な高額だろうから管理者権限で強制返還を求められるかもと心配したが……まずは一安心か。

安心すると張り詰めていたものが一気に切れ、妙な笑いすら込み上げて来る。周りのことにも頭が回るようになって来る。

窓の外はもう真っ暗だった。

「う……」

俺は背骨をバキバキ鳴らしながら伸びをして、それからパソコンの電源を落とした。

腹が減ったので飯食いに外出する。

今日もたった独り。ロンリー・ディナー。
るるるるら〜♪

このとき俺はまだ気付いていない。のんきに鼻歌など歌っている。俺が手に入れたアレが一体どれほどの価値の物か、今の俺はまだ知らない。

満腹になった俺はネットのことなどすっかり忘れ、家に帰ってからはTVのお笑い番組に爆笑していた。その日は疲れきっていたのでそのまま寝たが……次の日の朝、驚くべき結果が待っていた。

朝食を摂り終えた俺はパソコンの前に座り、学校へ行く前に、昨日かっぱらったアイテムがどのくらいの価値なのか確認することにした。湖底に隠す前に一応名前をメモっておいたので、YMRのアイテムや貨幣の取引情報を扱う裏サイトへ行って検索する。

「死海の宝玉……と」

検索欄に名前を打ち込んでから検索ボタンをクリック。
読み込みが始まる。

「……」

少しドキドキする。いやかなり。
心臓が昨日のテンションを取り戻していく。

【死海の宝玉】

現在価格取引	350円
YMR取引価格	8万5000ボル

まあ……悪くは無いか。

こんなもんか？

入手は難しくないしな。

レートは大体100ボル1円が目安だが、武器やアイテムは市場の流通量や需要で価格は激変する。8万ボルに対して出た、レート

以下の350円は、このアイテムの入手がいかにも楽かを伝えている。いたずら入札を避けるために端数は切っているらしいが……それにしてもショボイ。ちょっと期待外れだったが気を取り直し、次は一気にレベルを上げ、レア度9の『魔神の首飾り』を検索してみる。名前を打ち込んで……検索ボタンをクリック。画面に結果が表示される。

【魔神の首飾り】

現在取引価格	85万7000円
YMR取引価格	133億3400万ボル

「おお……」

画面に表示された凄まじい金額にしばし言葉を失う。新型のハイスペック・パソコンが買える。オプションパーツてんこもりで。これは予想外だった。体がちよっぴり震える。というか震えまくっている。

「うおお!! ありえねえ!!? さすがレア度9!! これマジ! ? 85万! ? ケタが違ええ!!」

驚くべき大金の到来に俺は半狂乱だった。興奮冷めやらぬ内に次の検索へ移る。

【邪神の籠手】

現在取引価格	63万1000円
YMR取引価格	88億4000ボル

【ガイナス・ヘルム】

現在取引価格	92万3200円
YMR取引価格	220億ボル

【デモン・プレート】

現在取引価格 12万800円
YMR取引価格 6億1000万ボル

レア度8の『ガイナス・ヘルム』が3年近く市場に出回っていないため、魔神の首飾りを上回る値段を付けていた。我を忘れて画面を凝視し、夢中でマウスをクリックする間、俺はずっと震えっぱなしだった。手も足も歯すらもカチカチ鳴っていた。

予想をかなり上回る予想外の連続に、俺は完全に正常な判断を失っていた。裏ページを閉じて即座にYMRに繋ぎ、サーバーを選択して専用キャラクターを立ち上げる。

あんな高価な物が湖に放置されているなんて……もう居ても立っても居られなかった。

値段が付いている物は取引待ちということ。

現実には買主は既にいる。

速攻でアイテムを拾って来て……何とかして売り払えば……幾らだ？

に、250万円ぐらい……？

「……………」

転送中に怖くなってわずかに冷静さを取り戻した俺は、自分の早計に気付き早々にログオフした。

駄目だ。今街に出たら捕まる……。

子供の小遣いじゃない。額が額だ。昨日今日の事件でほとぼりが冷めるわけがない。

アホか。先走りやがって。度し難い馬鹿だよ。盗んだのは昨日の今日のことだぞ。メールに連絡が来なかったからって、どうして安全だと言えるんだ？ 俺をおびき寄せるために罠かも知れねえだろ。

冷静になれ。

まずは冷静に深呼吸だよ。

アイテムはこっちが握ってるんだ。どんな天文学的確率であの湖の底に人が来ると言うんだ？

俺はリクライニングを利かせ、とにかく落ち着こうと天井を仰いだ。深呼吸しても考えが定まらず全身が硬直している。なんという小物ぶり。我ながら情けない。

信濃川とハイエナ稼業

「あれでもねえ……これでもねえ」

俺は学校に行くのも忘れ、アイテムの処遇についてあれこれ思案していた。

” Y M R 仲介屋 ” で検索すると、怪しいのから株式会社までズラリと出て来たが、追われる身で簡単にファルンにログインできない俺は、仲介屋に取引を一から十まで代行して貰いたい。そこまで依存するとなると……引き受け先を探すのは結構難しい。

「むう……」

椅子の上で行儀悪くあぐらをかき、仲介屋を吟味する。そうやってしばらく探している内に、俺はようやく一件のサイトに目が留まった。

” 仲介屋・信濃川 ”。

ホームページの入り口には古臭い木目調の看板があり、筆を使ったような達筆でそう書かれていた。

ページの中央には、二階建てのプレハブ小屋とおぼしき貧相な会社写真が貼っており、ページの左隅には、会社の住所、電話・FAX番号、古物商免許の登録番号などが記載されていた。

どうやら仲介屋だけじゃなく、中古品の売買や修繕などで手広く商売している個人経営の何でも屋のよう。最寄駅から電車で1つの近所だし、会社がちゃんとあるか自分の目で確認できるな。

(……ここに決めるか?)

ひとまずの候補として信濃川を選んだ俺は、地図を印刷し四つ折りにして仕舞う。よし完璧。

「じゃあ、学校……行かないとな」

時計を確認するともう昼前だった。

落ちこぼれにゃガミガミ言わない進学校だから別にいいけど。

学校が終わって放課後、直接会社の視察に行くことにした俺。カラオケやゲーセンやファーストフード目当ての帰宅部連中に混じって駅前へ向かう。

受験期間中ネットゲ断ちしていた反動で、ここ最近では四六時中ネット漬け引き籠もりに近かったから、駅の方に行くのはかなり久しぶりだ。

『武血殺死地獄坂駅』。

看板にデカデカ書かれた駅名は……まあアレだが、最寄りの駅前はどこにでもある素朴な風景を見せている。少しの緑と、ガードレールに沿って並ぶ乱雑な放置自転車と、無駄に駐車場のでかい中型ブックストアがあるだけの普通の駅前だ。

俺は券売機に90円入れて隣町までの切符を買う。一度急行を見送ってから電車に乗り、電車に揺られること1分半——隣町の『捻殺死煉獄駅』へと辿り着いた。

「ねじィー、ころしィー、れんごくう、えきー。ねじィー、ころしィー、れんごくう、えきー。お荷物のお忘れのないようにお氣をつけ下さい」

やたらドスの利いた声をした駅員のアナウンスを背に、地元に一歩も引けを取らぬ極悪な名前の駅が出る。

捻殺死煉獄町は古くからの町並みを保ち、自然との調和を大切にし、寺や坂道が多く、山道へと続く路は自転車のツーリング・コースなどにも用いられている。凶悪そうな名前からは想像もつかない穏やかな土地だ。

「さてと……」

俺は胸ポケットから四つ折りの地図を出して広げる。出かける前にプリントアウトした信濃川の地図によると、場所は最寄り駅から徒歩12分。閑静な住宅街の外れにある、公園前の寂れた広場に建っているようだ。

おっばい

2時間後。

「あつた……」

俺は無事に会社にたどり着いた。

到着予定時刻を大幅に超えてるけど着いた。

うらびれた丘の上から見る空はすでに淡い薄紅色に染まり、ちょっとした球場くらいある広場の中央には、寂寥感たっぷりの二階建てプレハブの存在が確認できる。

ここまで来るのにホント苦労した。

坂道が長い上に、道が複雑に入り組んでいて……かなり迷った。

鬼疲れた。信濃川の嘘つきめ。

「ちくしょう……地図、簡略化し過ぎだろ!？」

クシャクシャになった地図を見返し、信濃川地図の不親切さと、坂道を歩き続けた疲労感で、俺は改めてガツクリうな垂れる。

細かい分岐、道とは思えない獣道、電柱の陰に隠れた目印、不審人物を見るかのような村社会的地元民、水道管工事による通行止め……2時間で辿り着けたのはむしろ奇跡かもしれない。

「……信濃川、だよな？」

広場のプレハブの前に立った俺は、思わず自問する。

夕焼けを浴びて濃い影を落とすプレハブは、二階建てというより、地面から延びる四本の鉄脚に支えられた見張り台のような造りで、一階の吹きさらしを工房に利用し、天井に吊り下げられた大容量の照明の灯りの下、解体中の冷蔵庫や洗濯機、ミニバイクなどが無造作に放り出されていた。

でも、ホームページで見た写真より随分と老朽化してらっしゃる御様子。風が吹けばギシギシ音を立てそうな御様子。果たして、これを会社と呼んでいいものやら。

「まあ……せっかく来たわけだしな。あの、すんませーん！」

発電機の騒音と振動に負けないよう大声で呼んだが……しばらく待っても返事はない。

「おーい！ ……チッ！ 仕方ねえな」

俺は頭をポリポリかきながら工房を出て、プレハブ小屋の周りを探してみることにした。

「お……」

裏手をヒョイと覗いてみると、二階への道がすぐに見つかる。防災用に用いられる鉄のハシゴだ。塗装が剥げ、ボロボロになるまで使い古された頼りないハシゴの先に、入り口とおぼしき磨りガラスの窓が見える。

（行きたくないな）

窓を見上げて、俺は素直にそう思った。

「あ……もう！ クソ！」

もう帰ろうかとも思ったが、この場所に来るまでの苦労が走馬灯のように脳裏を過ぎると、どうしても後ろに足が動かなくなり――俺はハシゴに手を伸ばしていた。

クソ、こんなハシゴ上るなんて、小学校の防災訓練以来だ。

役に立ったね防災訓練！

防災ぜんぜん関係ないけどね！

憎しみの力で一気に窓の前まで上り切った俺は。足元を見ないように注意しながら窓を叩く。

どんだんどん！

「おーい！ いませんかー！？ ……クソッ！！ 磨りガラスだから向こうの様子が判らねえ！」

ぷるぷる震えながら何度も窓を叩いたが反応なし。

他人様より少しだけ高い所が苦手な俺は、とうとう痺れを切らして窓に手を掛けた。すると窓には鍵が掛かっておらず――意外なほ

ど軽く横にスライドする。

部屋の中には下着姿の少女が居た。

「「あ……」」

目が合った瞬間に声がハモる。

着替えの途中だったのだろうか、俺を見て目をパチクリされている少女は、藍色のツナギを足元まで下ろし、ブラジャーのホックに手を掛けていた。

（え、何これ？）

少女と見詰め合ったまましばし硬直していた俺だが、やがて諦めたようにフツと嘆息し、静かに窓を閉じた。

ああ……分かっていたよ。

アレだろ、『お約束』ってヤツだろ？

フツ、分かってたよ……今日は俺の負けさ。

ありがとう。もう帰るよ。おっぱいだよ。

ガラッ！！

「帰んなッ！！」

運命を受け入れて帰ろうとした数秒後、窓を勢い良く開けた少女が顔を真っ赤にして怒鳴った。

信濃川乙華

「……どうぞ、お掛けください」

「ど、ども……」

衝撃のワンシーンから一転、俺は少女から事務所に招かれ、今はこうしてソファに座っている。

少女はすでに作業用のツナギに着替え、今は仕切りの向こうに行ったから姿は見えないが、急須にお湯を入れるようなコポコポという音と、蒸らした茶葉の匂いが漂って来てるから、お茶を淹れてくれるのだろう。

窓から入るという特殊な構造をした事務所は……なるほど、いかにも事務所的な空間で、10畳ほどのスペースに来客用のソファとガラス製のテーブルがあり、右奥にスチール製の事務机、並んで右隣にスチール製の書架、部屋の左奥にはキャスター付きの仕切りがあつて、今、仕切りの向こうから少女が茶を配んで来たので、やはり奥は給湯室になっているようだ。

「どうぞ」

少女が素っ気無くお茶を勧めて来たので、俺は「あ、どうも」と、軽く会釈してから湯飲みに手をのばした。

「……えっと」

俺の前にちょこんと座っている少女。

真正面から見て、彼女がとても小柄なことに気付く。

姿勢がいいから身長高めに見えたけど、怜悯な印象を与える整った面立ちの中に、子供のようなあどけなさを残している。同い年の高校生くらいかと思ったが……冷静に見た感じ、実際のところ学生かそこいらだろう。

純日本人的な丸顔で小顔。長い黒髪が邪魔にならないよう襟首で結わえ、かなり色褪せた古そうなツナギを袖まくりして着ている。そして意志の強そうな切れ長の真っ直ぐな瞳は、観察するようにジ

ッと俺に向けられている。

……気まずい。

ネットゲ廃人寸前の俺は、異性に真正面から凝視されたことは久しくない。あるにはあるが数えるほどだ。

もしこれがYMRだったら、いきなり茶あブツ掛けて、怯んだところでワンパン入れて、トドメにヘッドロックでも極めればいいだけの話だが……ただ座ってるだけというのは想像以上に疲れる。なんか息苦しいくらい。

こ、これが……これが現実の痛みなのかッ！

「あの……お茶、美味しいッスね」

俺は引きつった笑顔で話を切り出してみる。

仕事を頼める雰囲気でもないし、気の利いた話題もないのでとりあえずだった……だがウソだ。ごめんマズイ。とてもこの世の物質とは思えん。

「……え」と

ジッと見つめられたまま返事が無いので、会話が終了する。

永遠とも思える無言の時間の中、俺は急激に背筋が冷たくなるような恐怖を感じた。どうにかして落ち着こうと、ドス緑色をした粘液をもう一度するが……やはりとんでもなくマズイ。

これ、お茶なんてレベルじゃねえぞ。

ゲロだゲロ。

悪魔のような極悪なマズさ。

「あ……あ、あは、アハハハ……」

舌が麻痺して、失敗した福笑いのような苦笑いが浮かぶ。

なんだこれ？　なんだこれ？　なんだこれ？

ナニコレ!!!?」

コレ、お茶でいいの!?!? お茶と呼んでいいの!?!?

飲料であっていいの!?!?

裏千家が、「おめっ、殺すぞッ!?!」と言って殴り込んで来てもフツ―に許されるぞ!?!?

なんつーか、身体を悪くすることが效能みたいなお茶だ。

スライムのようなデロリとした舌触り。

ひよっとするとひよっとして……ノゾキへの遠まわしな意趣返しだろうか?

「……………」

「す、すいません! マジですいません! ホント、さっきのは事故で! どうか警察だけは勘弁して下さい!?!」

とうとうプレッシャーに耐え切れなくなった俺は、口を開くや否や恥も外聞も無くペコペコ頭を下げた。

中学生の着替えを盗み見とか、『ごめんね、テヘペロ♪』で済ませるには微妙なお年頃の俺。断じて故意ではないが証明する術もない。ならば、疑わしきは犯罪だ!

もし訴えられて事件を取り沙汰されれば、ある意味、殺人よりも禍根を残すかも知れない最悪の事態となり得るだろう。

家に張り紙されて、塀にラクガキされて、マスコミがインターホン連打で、自称正義の味方からお届けされる「死ねコール」の電話が鳴りっぱなしだ。嫌だ。リアル変態は嫌だ。助けて。助けておっぱい。

邦画に、『それでも僕はやってない』という映画がある。

痴漢冤罪という社会問題を題材にした、裁判制度の在り方や警察の虚偽怠慢などをリアルに取り扱った社会派ノンフィクション映画だ。俺の観た限り、主人公はどう見ても冤罪だと思ったんだが、裁判に負けて犯罪者の烙印を押されてしまう。

このままでは性犯罪者だ！

どうする俺！？

どうするんだ俺！？

どうなっちゃうんだ俺！？

「初めまして。ウチは『しなのがわ信濃川乙華いつか』。以後、よろしゅう」

「……へ？」

「よろしゅう」

「あ、はい、よ、よろしくお願いします……」

俺が頭を抱えて脂汗をダラダラ流していると、少女改め信濃川乙華さんは、表情をフツと緩め、胸ポケットから取り出した名刺を差し出した。

意外な反応に俺はしばし戸惑うが、手渡された名刺を恐る恐る受け取り、そそくさと胸ポケットに収める。

何だ解らないが……俺の必死の謝意が伝わったのだろうか？

「あの……怒ってませんか？ その……訴えたりとか？」

「あれは不幸な事故や。出会い頭いうヤツや。もう気にしてへん」

「で、ですよねー！」

「許したわけやないで！」

「ですよねー！！」

信濃川さんは関西の方のようだ。気にしないと言ってくれたのはありがたいが、気にしてないと言いつつ腕組みして無然としてるのは何故だ。

「アンタ、さっき、お茶飲んだやろ？」

「え……いただきましたが？」

「ごめん。そのお茶な、うぐぐんと抹茶濃くして淹れたんや。一口飲めれば大したもんやで？」

「三口いただきましたが……？」

「ちよっ、おま……っ！？」

胃の中に熱い泥を流し込まれたような感じがするんだが、それが原因か！？ しかも言葉の最後の方に「抹茶以外にも色々混ぜたけどな……」とか、つぶやいたぞ！？

「あっはっはっは、災難やったなあ〜！ でも、これでお互い様やで〜！」

信濃川さん改め信濃川は、心底面白そうに腹を抱え、ケタケタ笑いながら俺の肩バシバシ叩いた。

うわあ……上方の人だ。

ツッコミ少女とハイエナ稼業

「あっひゃっひゃっひゃ！　ふう……ん？　青い顔してどないしてん？」

「いえ……」

笑いすぎて涙まで出てる信濃川は、目元を指で拭いながら俺の方を見て、ふと何かに気付いたかのように「ん……？」と唸りながら、いきなり近付いて来た。

「な、なに……？」

信濃川はテーブルをヒョイとまたいで、俺の座っているソファに片膝を着け、両肩に手を置き、鼻先が触れてしまいそうな距離で俺を観察する。

横から見れば、男が女をソファの上で抱きかかえてるに等しい恰好……猫のように大きな、深いダークブラウン瞳と、平凡な薄いブラウンの瞳が直線で繋がる。言葉もなく見詰め合うこと数秒……どうにも鳴り止まぬ心臓の音がみつともなくて、グツと息を堪えた。握り締めた手と背中がじんわり汗でにじむ。

「……アンタ、どっかで会わへんかった？」

「知りません！」

即答。息がもう限界。今までの人生の中で一番早い返答だった。でも信濃川はどうにも納得いかない様子で、顎に手を当ててウンウン唸りながら、たじろぐ俺の顔を右から左へと無遠慮に観察する。

ちょ、近っ！？　近い！　近いってばよ！

パーソナルスペースの侵害の仕方がハンパない！

「うーん……。思いだせんな」

「ああ、『重い打線』と言えば、やっぱ巨人ですよな？」

「そうそう、その通……アホかあいッ！！　それ、『重い』違いや

ねん!!」

スパアアンツツ!!

「いってえっ!？」

動揺を悟られまいと軽い冗談を言ったら、もの凄い勢いで後頭部を叩かれた。最悪なことに履いていたスリッパでだ。

でも、『重い違いと思い違い』。

自分だって何気に即興で掛けてたじゃないか。

「ま、ええわ。内地モンの素人にしちゃええボケやった。及第点やろう」

あなたは玄人なのか？

ツツコンでやりたいが面倒なのでやめておく。

「で……話は逸れたけど、アンタは仕事の依頼に来たんやろ？」

「はい、そうです。お仕事の依頼です。お願い出来ますでしょうか？」

「商売なんやし、そら仕事は歓迎や。——ンで、依頼内容はどんなですか？」

「仕事の内容は、YMRの仲介役」

「うんうん、詳しく聞こうか？」

「先日、ひょんなことから大量のレアアイテムを手に入れた。アイテムは秘密の場所に隠してある」

「ちよお……端より過ぎやねん」

ごもつとも。

ウソをついてもいいことなさそうだし……ここは正直に。

「実は手に入れたアイテムが略奪品なんだか、物が高価であちこちに手配が回っている可能性がある。ヤバイ連中も血眼で捜している。だから、俺は隠している場所には行けない。というか、サーバーにすら繋がられない」

「要するに、『いわく付き』を捌こうっちゅうンやな？」

「そういうこと」

「ええで。契約書用意するから、規約に目を通してからサインしてや。アンタ、今、学生証かなんかある？」

「ああ……」

信濃川はテキパキと書架からファインダーを取り出し、ファイルされていた契約書の一枚を俺に渡す。見ると――内容が結構細かい。取引内容によっては仲介屋も多大なリスクを負うから、契約の仔細は重要なのだろう。

たとえば、仲介屋がアイテムを預かった時点で何者かによって横取りされてしまった場合、信濃川は売買によって得られたはずの利益全額を俺に弁済しなければならぬ。非合法で危険な仲介屋の仕事は分かりやすいくらい単純なハイリスク・ハイリターン。だからこそプロの仲介屋は、リスクを出来る限り減らすために、ほぼ例外なく『最強クラスの戦士』を扱っている。

「けったいなモンでも欲しいってちゅう購入者のリストアップして……それ済んだら一度連絡するから、そのときにアイテムの場所教えてや？」

「ああ、わかった。で、サインするのはいいけど、その前に使用キヤラを見せて貰えるか？」

あらかた契約書に目を通し領いた俺は、万年筆を手元でクルクルさせながら当然の確認を申し出る。

「フン……ええで」

相当自信があるのか、信濃川は無い胸を誇らしげに反らした。そして好きなだけ見ろと言わんばかりに、机上のノートパソコンをワントッチで持ち上げ、その画面をくりと俺に向けた。

【鬼神侍】

Lv4973

殺戮と血に餓えし、外道に堕ちた侍マスターの成れの果て。

即死を招く最速抜刀術『居合い』を使いこなし、あらゆる呪いを

一切受け付けない。

敵の血を浴びた分だけ自身が回復するが、定期的に血液を補給しなければ死亡する。

特殊アイテムによる『引継ぎ』を例外とし、現在のYMRでは失われてしまったジョブである。

「YMRのレアジョブか。見たことないけど……いつのだ？」

「なんと5世代前やで！ 『殲雷帝ゼリア』が魔王やっとなった！」

YMR最大の混沌期を生き抜いた超希少ジョブや！ どやどや、驚いた？」

信濃川の言う『5世代前のYMR』は、とにかくプレイヤーの実力主義が前面に出た、排他的な弱肉強食の時代だったらしい。まだサーバーの数も管理者の数も足りず、物見遊山の新規を見かけたら問答無用で斬りかかってくるような連中が暴れ回っていた。まさに群雄割拠の混迷期。その世紀末的地獄から今日まで生き抜いて来れたということは、言うまでもなく相当な実力者ということ。

だけど……その時代って確か、俺が産まれる前……。

「……………」

「どうした？ 驚いて声も出エへんか？」

信濃川はとても満足げ。だが俺は別の意味で驚いていた。

こいつ何歳？

大日向とハイエナ稼業

年齢に関してはまあ……おいとくとして、実力的にまったく申し分ないLvだ。

『申し分ないLv』とは言っても、YMRでのLvってのは、プレイヤーが刻んで来た戦歴であり、たとえるなら空手とか剣道の『段位』みたいなモンで、Lvが上がっても、目に見えて力が強くなるとか、強力な魔法を覚えるとか、通常のゲームにありがちな『ソッチ』系の特典はほとんどない。

力や魔法は、Lvとは別の創意工夫や努力によって得るものであって、単に時間をかけて親指の皮スリ減らしたって強くなかなれないのだ。まあでも、ジョブチェンジやジョブランクを上げるのにLvは必須だし、一定のLvから『国家認定試験』を受けなきゃLvは上がらなくなるから、Lvの高さが国家お墨付きの『戦闘能力証明書』みたいな目安になる。だから、Lvがまったくの無駄とは思わない。

俺の場合は、ジョブチェンジを請け負ってくれる『ギルド』に所属できない『PK専門』だから、Lvをリセットしてアイテムだけ引き継いだけどな。見た目が弱そうだと相手も油断してくれるし、高いLvに釣られた連中に『いっしょに行きませんか』とか誘われんの心底うざったかったし、正直邪魔でしかなかった。

しかし……『鬼神侍』とは恐れ入った。

こんな僻地で廃墟みたいなプレハブ建てているから、よっぽど使えない業者なのかと思ったが、こいつは拾いもんだった。あとは……契約書の文言に少し気になる所が。

「なあ、仲介手数料は仕事の内容や各サーバーの情勢・転送量・危険度によって上下します——であるけど、俺の言った内容の仕事をファルン王国でやるとしたら、どのくらい手数料を払えばいい？」

「うゝん……8%やな……」

安っ！？ 安いよ！？ 普通、この難度の依頼なら30～50%くらい持ってかれるがザラなのに！？

いや……待て。まだ笑うな。こらえるんだ。

安すぎるのは却って怖いぞ。

相場を大きく下回る低価格なんてのは、廃品回収やペニオクくらい裏があるのが世の常だろ？ そこら辺は冷静に見極めないとな。

「にこにこ♪」

信濃川は机の前の椅子にちょこんと座って営業スマイル。そのあまりに屈託の無い笑みに、俺の裡に眠る邪な心が激しく疼き出す。

ひよっとして相場を知らないとか？

じゃあ……サインしていいよな？

あとで思い返すとアホみたいなこと言ってると思いますですがはい、このときの私は、これで正常だと思ってましたですはい。

「か、かなり厳しいが……ギリギリ出せないこともない」

「ホンマ！？ じゃ、契約書にサインしてくれるんか？」

信濃川は目を輝かせて満面の笑み。ここで俺まで大はしゃぎしたら不審に思われる。努めて冷静を装い、身分証をコピーして貰うために学生証を渡した。そして何度も目を通した契約書を最後にもう一度だけ軽く流し読みして——サインする。

『おおひなた
大日向 修二』と。

信濃川は契約が取れたことに小躍りし、俺がサインしている間に学生証を手帳から抜き出し、電話と一体型のFAXに学生証を挟んでコピーしようとして——そこで手が止まった。

「どうかしたか……？」

異変に気付き顔を上げると、信濃川は背中を向けたまま、机の上に両手を置いて小刻みに震えていた。

「お……おい？」

ただ事ではない震え方だった。とても冗談には思えないくらい。全身がガクガク上下に揺れている。この世の終わりでも見てしまったかのように震えている。

「大日向……アンタ、『大日向』言うん……？」

「……？　そうだけど、それがどうかしたのか？」

「大日向……やっぱり、そうか……そうやったか」

「……な、なに？」

「……去ね」

「い、稲だと？」

「ちゃ、ちゃうねん！　アホかいな！？」

顔を真っ赤にして唾を飛ばす信濃川に、手の甲でビシッとツツコミ入れられた。

いったい何を激しているというのだ？

怪人伝説とハイエナ稼業

「はあ……やってられねえ」

何だかよく分からない内に事務所を追い出された俺は、宝箱ひっくり返したみたいな満天の星空を見上げながらぼやいた。

自慢にもならないけど、俺はわりと記憶のいい方だ。

あの女に関して、俺が不徳とする覚えは断じて無い。無いと断言できる。……ノゾキは除きます。

むしろ俺こそ腹を立てるべきなのだ。理不尽に言い掛かりをつけられたのだから。思い出すと、なんかちよっとムカムカする。

「ちい、ビッチめ……」

世の女性全員を敵に回しても一度は言ってみたい男のセリフNO13を吐き捨て、俺は独り駅へ向かう。来たときと違い、帰り道は漆黒の闇の中だった。

蛇の背中のように細くうねった道はかなり視界が悪く、死にそうな蜚みたいに明滅を繰り返す点々とした外灯を頼りに、足を踏み外さないよう戦々恐々としながら歩く。

【深夜の武血殺死地獄坂町・住宅地】

信濃川乙華とは何なのだろう？

駅を出て家路に着く500mの間、俺の悩みはそれに尽きた。

やっぱり名前も顔もまったく記憶に無い。政治家が壇上でのたまう「記憶にござーあせん」のような誤魔化しなんかじゃなく、本当に知らない。

チッ……あー、もういいや。もういい。考えんのメンドー。

もう二度と会うこともないだろうしよ。

消去だ。記憶から抹消だ。

「ただいま」

電気の消えた真っ暗な家からは当然、誰からも返事は来ない。俺は寂しい現代っ子だ。

駅前から商店街の途中にある行き着けのコンビニに寄って、シーザーサラダと、ツナおにぎり2個と、ゆでたまごと、味噌汁と、烏龍茶と、ナルトの最新刊を買った。食料等が満載した袋を一度台所に置き、台所の向かいにある居間のハイビジョンTVを点けて、チャンネルをNHKに合わせ、ニュースをBGMに洗面所に向う。

洗面所で手を洗う。うがいをする。洗面台の鏡に映る俺は、いつもより覇気の無い顔をしていた。

食事を終えて部屋に戻る。

いつもの様に制服の上着を掛け、そのついでにPCの電源を点けようとして……やめる。まだ包囲網は緩んでないだろうし、いまいち気分が乗らなかった。

「そういや、まだチェックしていないアイテムがあったな……一番レア度が高いヤツ」

アイテムソケットの場所を1ブロックしか使わない存在感の薄さと、他の高額アイテムの数々に心奪われてたから、ついすっかり忘れていた。

「レア度10か……」

気が変わって、俺はPCを起ち上げた。お気に入り登録済みの裏サイトに移動し、『バザルドの玉兎器』で検索してみる。

現在取引価格 1億7800万円

YMR取引価格 カウント・ストップ

「……………はい？」

そこには、ありえない数値が並んでいた。

あまりにも法外すぎて、さすがに何かの間違いだと思ったが、小心者の俺は画面の前で完全に固まっていた。

「……」

息をするのも忘れてもう一度凝視する……間違いなく1億。
1億と7800万円。

「ハア、ハア、ハア……ッ!!」

俺は荒い息を吐きながら、折れ線グラフで表示される価格変動の履歴をクリックして見た。平行線を辿る緑のグラフィンが昨晩を境に急激に急上昇し、異常な値上がりを見せている。2300万円から一気に5000万、8000万、そして1億の大台に突入し……今現在、価格1億7800万円。

異常。

異常すぎる高騰。

今度は入札履歴の経過をさかのぼって見ると、かなり多くの人間が競り合いに参加した様子が窺える。もしや、自爆覚悟のイタズラか……とも思ったが、今一番高値を付けている『S・R』という人物の取引履歴を調べると、321件全てを滞りなく完済している。

イタズラじゃない……?

じゃあ、この数字の異変が示す意味は何か?

「い、い、いち、いちお……く?」

だが、そんなこと冷静に考えられるほど俺は優秀な少年ではない。何故なら、人の獲物を掠め取ることしかできない小物でしかないからだ。

YMRの公式BBSでは、驚異的な値動きを見せた『バヂッドの玉兎器』の行方を巡って、かつてない祭りが繰り広げられていた。「殺してでも奪い取る」というふざけ半分の意気込みを書く連中が大多数で、「何か秘密があるのでは?」という憶測から、根も葉もない噂を流す自作自演まで、サーバーが混雑するほど大いに盛り上

がっていた。

でも、アレの場所を知るのは俺だけ。つまりだ。俺は掲示板を埋め尽くす膨大な書き込みの真贋を選別できる立場にある。真実を手繰り寄せれば、ひょっとして、異様な価格高騰の真の理由に辿り着けるかもしれない。

「よし……」

俺はバジッドに関係する一番始めのスレから遡り、膨大な量の書き込みのチェックを始めた。目の前にカオスの坩堝が牙を剥く。

【愚弄度】

バジッド持ってるよ

2億円で売るよ

【タイガー・アイ】

要らぬなら貰うぞ、そのバジッド

【最前線】

R・P・Gッ!!!!

【ゴロー】

バジッドを語るときは、なんというか、救われてなきや駄目なんだよ……

【魚民】

それ以上いけない

スレタイに『バジッド』と書かれた、まったく関係無い便乗スレが幾つか紛れ込み、俺の調査は難航を極めた。ネットの専門用語が少し出たが、解らないならググレ（検索しろ）。

「ちいっ」

俺は舌打ちして、机の抽斗から取り出したUSBストレージをパソコンに挿し、その中に保管されている、ネット掲示板専用の自作ツールを起動させた。巨大掲示板の書き込み全てに『バジツド』関連のキーワード走査を掛け、内容を識別し、選別し、絞り込ませていく。

ジジジジジ……

メモリが音を立てて走査の進行を伝える。

2分程度で振るいに掛けられるだろう。俺は背もたれに深く寄り掛かり、指を絡ませた腕を前に突き出し、そのままグンツと上に伸ばした。肩甲骨の辺りからポキペキパキベキツと小気味の良い音がする。

「あが……ッ!？」

『ベキィツ』は破滅の音だった。

ブーン　ブーン

背中に走る鈍い痛み之苦悶の表情で呻いていると、マナーモードに設定してあった携帯が机の上でダンスを踊り始めた。

「はい……」

苦痛のあまり怨念でも込めているかのような声が出て、それを聴いた電話の相手が「ひうつ」と、小さく息を呑む。

「あ、あの……夜分恐れ入ります。わたし、信濃川と申しますが、大日向さんのお宅でしょうか……?」

「……え?　信濃川……さん?」

「あ……ああ!　ええと……ど、どうも」

「何か用ですか?」

どうもだと?　帰り際にドロップキックかましやがって。

でも、ムスツとしながらも敬語くらいは使ってやる。一応、年上

みただし。

「あの、さっきはごめん。やりすぎやったわ……」

「いやなに、たかが噛み付き・目潰し・金的の三大コンボかまして、跳び蹴りで二階の窓から叩き落したくらいじゃないですか。そんな、お気になさるようなことじゃありませんよ」

事務所でのことを根に持っていた俺は意地悪な口調で、信濃川の悪逆の数々をわざとらしく並べ立ててやる。

でも、下が土と芝生だったとはいえ、受身取れなきゃ死んでたな……アレ。

親子秘話とハイエナ稼業

「だ、だから、ホンマ、ごめんって、悪かったって……それを、弱みにつけこむように、いつまでもいつまでも……グチグチしつこいんじゃない!! 男のクセしてオイコラアッ!!」

「テメ、謝る気ねえだろ!!?」

15分くらい続けたら信濃川がキレた。筋モンが借金返済の追い込みかけてるような荒い語気に、俺も思わず素になって、クールなイメージかなぐり捨てて怒鳴り返す。

「大体お前みたいな女、ぜんぜん知らねえよ! 今日が初見だったの!」

「そらそうや! ウチがカチンと来たんは、おんどれンことやのうて、『大日向』っちゅう冠や!!」

「……あ!? どういうことだよ!?」

「そこまで言うんやったら教えたるわ! そう、あれは……21年前のことやった」

「え……回想入るの?」

「ウチのおとんは……地元ナニワで、プロレスの興行打った、興行主兼花形レスラーやった。でも当時、より実戦的なリアル志向のファイトが一般大衆に受け入れられつつあった時代で、ウチの団体はいつも経営難にあえいどったわ。そんなおりや……東のプロレス王と名高い『イビルー・ジョー』こと『大日向 おおひなた 鰐王^{わにおう}』が、ウチの団体に挑戦状を叩きつけて来たんわ!」

「え、親父?」

「せや!」

ここにきてまさかの親父。俺は汗ばむ手で携帯を握り締め、動揺のあまりガタツと立ち上がった。

「い、いったい、親父が何をした?」

「ふん、おんどれのおとんこそが元凶! 大日向こそが悪ッ!」

信濃川がフーフーと息を吐いて、獣のように唸る。

しかし……まさかここで、地方遠征中の親父の名前が出て来るとは思わなかった。

信濃川の言う通り、俺ン家の親父はプロレスラーだ。母親もプロレスラーやってた（年取ってビジュアル的に厳しくなったので裏方に回った）。確か、戦時中に在米中だった爺さんも、悪役^{ヒール}としてこっそりプロレスやってたらしい。

そんなプロレス一家である親父達は、『夫婦プロレス』という名前の男女混合団体を率いて地方を旅している。だからいそがしくて、家には滅多に帰って来ない。

中学までは俺も付き合わされて、日本の方々まで転々と流れて行ったが、ある日お母さんが言った「このままじゃ友達もできないし、よくないんじゃないの？」という、十年ほど前に言っただけの言葉がきっかけに、有名進学高校合格を条件に独り暮らしを許して貰った。

「ウチのおとん……『タンカー坂口』は、イビル・ジョーの挑戦を果敢に受けて立った」

「おまえの親父のリングネームだっせえ」

「やかましっ！——おとんは勝負世界に身を置いとるから逃げるわけにはいかん。おとんは、イビルが提示した弁当代と交通費支給について釣られて……麦わら帽子かぶって、短パンにタンクトップ姿で、首に一眼レフカメラまで提げた、典型的なアホ丸出しの田舎もんスタイルで都会へ乗り込んでった」

「それもう釣られたレベルじゃねえよ。山下清かよ。つーかおまえ、親父のことあんま尊敬してないだろ？」

「おとんは負けた……」

「そうか……残念だったな」

「おとんは負けた！」

「わかったよ！　なんで二度言ったの！？」

「おとんは負けた……」

「なんでテンション下げてもう一度言うの？」

「でもな、負けたんは実力で劣ってたからやない！ おとんが負けたんは、イビルの卑劣な罠が待ち構えとったからや！」

「……親父は何をしたんだ？」

ゴクリと唾を呑む。

「試合開始のゴングと同時におとんは棒立ちになった。なんとまあ、相手は宿敵イビル・ジョーならず、うら若き美しい女性！」

「段々芝居がかってきたな……っ！ か、今さっきまで重ねてた俺の親父への恨み言はなんだったんだよ……っ！？」

「誰やねん！ おとんは叫んだ！ その問いに女は答える——美しき戦闘妖精『テルヨ』！」

「え……テル……お母さん？」

おおひなた てるよ
『大日向照代』は俺の母親だ。

でも、『美しき戦闘妖精』って何！？

「テルヨはコーナーに登って、ジャンプ一番、芸術的な高さとフォームから繰り出されるドロップキックの一撃で、おとんを粉砕した！」

「……………」

お母さんは、俺が物心つくころにはすでに事務の仕事やってたけど……人に歴史ありだな。ドス黒いけど。

仲直りとハイエナ稼業

「あー……なんだ、その、うちのテルヨが悪いことをしたな」

団体のエースが女に蹴られて負けとか失笑モンだが、ノゾキの一件がチラツと脳裡をよぎり、面倒だから適当に謝っておく。

「――なんや台本とちゃうやん！　ウチと妹は、リングサイドで悔しさに泣いとったわ！」

「いや、台本とか夢壊すようなこと言うなよ……てか、妹いたの？」
21年前で父親と遠出できるくらいの歳だとしたら、最低でも25前後か……実際のトコいくつ位なんだ？　まさか、30歳は越えてないよな……あの外見で。

「おとんが勝ってれば、明日は浅草のデイズニールランドに連れてってもらえたはずなのに！！　なんでこんなことに……！！　ウチらは泣いた！」

「姉妹で私欲丸出しだな！？　でも確か、浅草にデイズニーはないぞ。『花やしき』の間違いじゃないの？」

「そないなこと、今はええ！　ウチらはリングに這い上がって、おとんに駆け寄る！　おとーん！」

「ねえ、その芝居口調もうやめない？　なんかイライラするんだけど……」

「――こおのダメおとんがああ！　なに負けさらしてんねん、この負けブタがああ！　倒れて曙のように動かないおとんを、絶世の美少女二人が殴る蹴る！！　口汚い罵声を浴びせる！！」

「やめたげてよお！？」

何してんのこいつ！？　極道！？

「おとんはおとんで、ワリとまんざらでもない顔！！」

「キモイな！！」

「そんなことで、ウチは『大日向』を憎むようになったんや……」

「え、終わり？　……え？　いや、ごめん。ちよつとよくわかんない

かったんだけど」

本当に意味がわからんぞ。

逆恨み？

「察しが悪いやつちゃん！ 西のモンが特に対抗意識を燃やしている東モンに——しかも女にボロカス負けて、どのツラ下げて地元のリングに戻れんや！？ おとんは事実上、その試合で選手生命を絶たれた！！」

「でもそれって、俺の親父が画策したことなのか？」

「……せや！」

ちよつと言い淀んだな。感情的になってる分、話の内容に誇張や脚色が多分に含まれてそうだ。そもそも不意打ちなんてプロレスじゃ常套手段じゃねえか。謝る必要ないじゃん。

「——でさ、信濃川さんはどうしたいんだ？ 確か契約書って返してもらったよな？ 俺の電話にどうやってかけたの？」

「あんなん、パツと見れば全部覚えるわ」

「あの一瞬で！？ ちょ、怖いな……で、文句を言いにわざわざ？」

「……ちやうねん」

「ん？」

「あの……さっきは蹴ってごめん」

信濃川はモニョモニョと、蚊の鳴くような声でそうつぶやいた。

「え、そ……そうか？ ど、どうしたんだ急に？」

急に謝られて、それまでポケッツコミの応酬をしていた俺はどういう反応を返せばいいかまったく判らず、苦虫を噛み潰したような、なんとも言えない複雑な顔で言葉を返す。

「よく考えたらウチ、アンタにテルヨと同じことしたわ。それで胸がなんやモヤツとして、アンタが帰ったあとに今話したこと思い出した……だから、ごめん」

「……わかったよ。べつに、もう気にしちゃいない」

素直で真摯な言葉に、俺は皮肉を言う気すらおきなかった。

俺の言葉を聞いた信濃川は「よかった……」と安堵の声をもらし、

それを聞いた俺も、何故だか少しホッしたような気がした。

これで信濃川との件は一応決着はついたみたいだが……でも何か、全身を掻き毟りたくなるような気恥ずかしさが残る。こういうのが困るから、他人と話したり団体行動すんのが嫌いなんだ。

信濃川乙華。

口は悪いし手も早い、根は悪い人間じゃなさそう。

丁度いい。俺は渡りに船と思い、再び契約の話を持ち出してみた。ネットで確認したバヂッドのことを話すと、信濃川も相当おどろいた様子で、「かなり大きい話だし、ちょっと妹と相談させて欲しい」と言い、とりあえず明日、『オン（ゲームのオンライン上）』で直接会って話そうと約束した。

「実力を見せたるわ!!」

思わぬ大仕事に舞い上がり、やる気満々の信濃川がそうおっしゃったので、待ち合わせは場所は戦闘能力を如何なく披露できる、かなり血生臭い場所となったが……。

【週末・ファルン王国城下・闘技場】

ファルンの闘技場は、南大陸最大規模を誇る『ビッグ・タワー』や北方に位置する『ゲマニウム大闘技場』などと比較すれば極小規模にすぎない会場だが、人類と魔族が生存圏を懸けて争う熾烈な最前線ともあって、その質は大陸に決して劣るものではない。

事実、世界広しといえど50人にしか許されないS級ランカーをファルン闘技場は4人も擁し……その内の1人は、三世代前のYMR覇者——世界最強の雷撃使い『ライトニング・アルコニー』を打倒してトップに上り詰めた男——燐の覇王『バルクロイ・エルガー』である。この男こそが現・世界最強の闘士であった。

深い暗闇に包まれた広い会場の中央舞台に、スポットライトの光

が交差するように照射された。

すると何かが闇の中から浮かび上がる――それは人間の子供サイズほどある大型マイクであった。目鼻はなく手も存在せず、ただ底面に素足がニョキツと生えたような奇怪なモノだ。ざわめく会場をよそに、悠然と歩き始めたマイクは、やがてバリトンの効いた声でポツポツと語り始めた。

よく来たな。

より強き者を求め集結した戦士どもよ。

聞け、ファルンには1つ在る。

YMR開始から今日までの67年、未だ最下層に辿り着いた者が誰1人として存在しない、マニア垂涎の超難関ダンジョン。これは現在、王の命によって封鎖されてしまっている。

聞け、ファルンには1つ在る。

六の魔将を束ねし最強の『焰産み』が支配するファルン山岳地帯！！これは現在、ファルン正規軍と魔王軍が南東と北西に分かれ、血で血を洗う戦いを繰り広げている。

さて、他にないか？

ファルンには他に何かないのか？

あるさ、ファルンに。

ファルンにはとっておきがある。

大陸人よ、小国島国と侮るなかれ。

ファルンの骨子はこちらにある。ファルンの歴史はここにある。

18歳未満は自己責任！！ 無法極まる血に餓えし戦士の墓場！

！ ここ大闘技場が控えている！！

如何なる公権力も宗教力もここでは無力！！ 種族、言語、思想、

肌色を問わず、ただ力こそが正義という超公平、超平等が支配する

『完全なる世界』
パーフェクト・ワールド！！！！

場内はYMRから完全に独立した機構で稼動し、ゲーム上では惜しくも弾かれてしまう過激なプログラムも、新システムとの整合性

に欠ける過去の英雄達も参戦可能!!

嵐の如く血風吹き荒れ、臓物が雨霞と飛散する!!

骨が軋み肉が弾け!! 死ぬまで闘う狂宴の舞台!! 古代ロー

マを彷彿とさせる闘士達の最後の楽園——ラスト・バトル・フロンティア!!

さあ集え、世に馴染めぬイカレたバトル・マニアども!!

平和を憎み共存を好しとしない、血と暴力に恍惚する狂乱の戦士達よ!! この『ファルン・最終血戦大闘技場』だけが、貴様らのクソ汚れた存在全てを肯定する!!

汝、隣人を殺せ! それが正義だ! オツケエ?

DJ風のしゃべり口調をした二足歩行する大型マイクが、笑いとブーイングを浴びせられながら、逃げるように舞台袖に引っ込む。

『——さあて、血が騒ぐでえ!』

信濃川古物商御謹製、全身の至る所から刃を突き出している、薄紅色の外装をした鬼神侍——『掛布』が、闘技場の高い天井を見上げながら邪惡な牙を剥き出しにしている。

高い。本気で高い。蒸し餃子などを作る蒸籠セイロのような形の屋根の頂点は、直線距離で220m。ドーム外周は半径1550m。この舞台は、人間はおろか、竜族や機鋼兵（ロボットのような兵隊）が闘う舞台でもある。

ここじゃ、背後から刺されても刺されたヤツが悪いという無法なルールが通っていて、そこら辺に内臓をデロリと出した死体が無造作に転がっている。でもそれが日常風景と化しているこの場では、そんなの誰も気に留めないが。

『大丈夫か? ここって超上級者向けだろ!?!』

『心配御無用や! それにタクは、こっからしかファルンに入れへんやろ!!!』

会話の最中——闘技場の中央で、斬首された生首が高く飛んだ。一瞬の静寂のあと、熱狂した観衆が鼓膜を揺さぶるほどに絶叫し、

そのせいで会話が混線して途切れた。

マイン・コアの戦

闘技場内は常に騒々しく、まともに音声での会話は成り立たない状態だった。

一瞬の隙も許されない闘いに臨む闘技場の上級プレイヤーは、画面が一部占領されてしまう文章表示での会話を好まず、そこで、魚河岸のセリのような独特の身振り手振りの会話を生み出し、それを用いて意思疎通を図っている。

例えば今、信濃川が、ぶつかって来た右隣の席のヤツにやっている『中指をピンと立てる』ジェスチャーは、笑むように細まった目元と組み合わさって『ぶち殺すで♪』という意味に見て取れる。俺は闘士同士のコミュニケーション文化にさほど詳しくないが、たぶん間違いない。

『——おい！』

『——や？』

俺と信濃川は耳元で怒鳴りあっているが、興奮した観衆は津波の如くざわめき、会話を妨げている。

しかも俺の直ぐ後ろでは、見上げるほど大きな巨像に跨る、頭にターバン巻いた恰幅の良い『大富豪』^{モハメド}と、白き重武装騎馬に騎乗した『長槍焰騎士』^{フレア・ランサー}との乱闘がおっ始まっていた。

まさにカオス。無法地帯。

岩塩の結晶体で構成されたクリスタルのように半透明な巨像は、石柱にも等しい長大な怪腕を振り乱し、周囲の観客を片っ端から薙ぎ払っている。

『ゴガアアアッ！！！！』

叫びながら一心不乱に暴れ回る巨像は、攻撃対象である長槍焰騎士が眼中に無いのか、大股に標的をヒョイと飛び越え、人でごった返す観客席に乱入し、観客を片っ端から驚掴みにして闘技場の舞台へと放り込んでいる。

『ヒヤッハー！』

『この、ブチ殺すぞオラァァー！！！！』

投げ飛ばされながらも悪態を吐く元気な観客達。武器を抜いて巨像にぶつけるもまったくの無意味で、連中は地面まで100m以上落下し、小さな赤い花を咲かせて散った。

『アッハッハ！！ 見ろお、闘士がまるでゴミのようだッ！！』

『あの巨像……腐ってやがる！ 生成が早すぎたんだ……ッ！！』

大巨人が巻き起こした狼藉にも動じず、ヤンヤンヤの喝采を浴びせる荒くれども。巨像の核として収められている水晶球内の木精霊は、精霊を使役する術者の慣らしが甘ければ、命令を受け付けず制御不能に陥ることがあった。

精霊を暴走させてしまう単純なミスを犯すプレイヤーが、自力ではなく金で地位を掴んだ軟弱な凡愚であるいうことは、熟練プレイヤー達からすれば一目瞭然。周囲からドッと沸き立つ笑いは、場違いな役者を嘲笑しているかのようだ。

『おのれ……おのおのれ！！ 言うことを聞けえい！！』

巨像の頭に必死にしがみついて喚き散らすモハマド。破壊の限りを尽くす巨像の頭を銀の杖でガンガン叩いて言うことを聞かそうとするが、それはむしろ逆効果であった。

『ゴアアアアッ！！！！』

憤怒した巨像が主を振り落とそうと首を大きく一回転させ、地面に両手両膝を着くと、そのまま祈るように額を床に叩き付けた。

グチャッ

重厚な石造りの中央通路上で、完熟トマトを叩き付けたように、モハマドであった内容物が一面に飛び散る。

『うお……エグッ……』

ちぎれて骨が露出した腕や、裂けて汚物を飛散させた腸が通路や座席の上に垂れ下がり、とんでもなく凄惨な光景が生み出された。

オンラインでの殺しに慣れている俺でも、これにはつい目を背けそうになる。

規制の小さい掛からない闘技場での死亡は、フィールド上とは比べ物にならないほどリアルでグロテスクなものだ。哀れ、かつて人であったものは、原型を留めぬグズグズのミートソースと化した。実力もなく、見得で城塞攻略仕様の巨像を操ったせいで引き起こした大惨事。自業自得と言えばそれまでだが、主が死んで、巨像は完全に歯止めが利かなくなっている。それでも手を叩いてゲラゲラ笑うあたり、この場所のお国柄というか……大闘技場柄というか。

『えらいこっちゃ！ 大仏様が暴れとるで！？』

信濃川が身振り手振りを交えて言った。俺も返事を返そうと手を交差させるが――そこで、音声を通じていることに気付く。

『あれ？ 普通に聴こえてるぞ？』

『……え？ あ、ホンマ！ ウチもや！』

巨像の暴走に巻き込まれて周囲の観客が粗方消えたお陰か、一時的に通信が回復しているようだ。まだジェスチャーに慣れてないから、これはありがたいぞ。

『さて、本日の第二試合！！ エントリーナンバー3番、Aランカー期待の新人の登場だぁー！！ 北門より訪れしは、永久凍土の氷の勇者！！ 北ドルストイ領出身、五核使い！！ 『マイン・コアの戟』^{ゲキ} イー！！』

巨像が暴れようが、そんなの闘技場じゃ日常茶飯事。

舞台の上では、未だ血みどろの試合が続行されていた。

『……あ？ 五核使い？』

『マイン・コア……？』

『誰だよ？』

微妙な知名度の選手が登場したようで、観客は盛り上がっているのか盛り下がっているのか判らず、ざわめきながら顔を見合わせる。どうやら俺の出番のようだ。

『クックック……まさか、こんなところで、あの『マイン・コア』に出会えるとはな!!』

『なっ!? し、知っとるんかタク!?』

『ウム!!』

信濃川の疑問に対し自信たっぷりにうなづくと、俺の二つ前の座席に座っていた――どっかで見たことあるジジイが、目をクワツと見開き、怨念めいた顔でこちらを見ている。

『よし! 説明してやろう!!』

でも知ったこっちゃないので、俺は解説を始めた。

『五核使いの『マイン・コア』とは、地・水・火・風の四大精霊元素を魔鉄芯に込めて使う死神だ! 鉄の杭で一度刺され、二度刺され、三度刺され、四度となるともう詰み……。最後の五本目を打ち込まれたとき、如何なる生物であろうと耐えることはできない! 五本目の起爆芯が打ち込まれれば、それによって、既に打ち込まれた四大元素の芯核が連鎖反応して内部から超爆発を起こす! 確実に死に至るのだ!!』

『おおー!』

『それはすごい!』

魂がこもった俺の解説に観客達は素直に感動したようだ。

前の席のジジイが膝を抱えながら、『韻が踏めてない』とか『臨場感が足りんわい』とかぼやいていたが……ま、俺はとりあえず満足だ。

『よっしゃ! いけえ!! ゲキイイ!!』

『がんばれええ!!』

『いったれ! ぶちかましたれ!! ゲキーツ!!』

俺の熱の入った解説で感情移入したのか、観客達はマイン・コア一色となって声援を送る。

だが十五分後……ゲキは敗けた!!

対戦者であるBの上級ランカーを相手に圧倒し、鎧の隙間に杭を四本も突き刺したが、最後にカウンターで一回斬られて死んだ。死体は会場の隅っこで野ざらしとなっている。

まあ、TENGAみたいにぶっとい杭を五回も刺さなきゃ殺せないなんて、よく考えたら非効率的だしなあ。あばよ、マイン・コア……成仏しろよ。

『なんだよゲキ、使えねえな！』

『応援して損した！』

『カス！』

客はシンプルで、勝敗に対してとても素直だった。負ければただのゴミか……なんか世知辛れえな。

戦鬼とハイエナ稼業

『グガアアアアアア！！！』

観客席では、巨像が相変わらずの大暴れだ。

一方的にやられてなるものかと、各国から選りすぐられた腕自慢の冒険者や闘士達が、刃物や銃器など強力な武器を手に立ち向かうも相手にならず、腕を払っただけで鼠のように駆逐されている。

こりゃ軍隊でもこなきや収まらん……そう思った矢先、ラオウが乗るような巨馬を従えた長槍焰騎士が、巨像の前にカップポカップと回り込み、長いリーチから繰り出す閃光のような槍の一撃で、巨像の額にあるガンダムっぽいV字の飾りを打ち砕いた。

『つ、強エエ！！』

額を砕かれた巨像がよろめきながら片膝を着き、俺はその威力に思わず身を乗り出した。

騎士の手元が光ったかと思えば巨像の顔面の一部が弾け飛んだ。

『ガンダム』っぽかった巨像が額のアレを砕かれ『ダム』っぽいものへと変わり、観客達はヒートアップする。

巨馬に跨っていたとはいえ、20m近い巨像の顔面に槍の先端が届かせるとは……騎士の持つあの長槍は、^{ランス}見た目よりもずっとリッチがありそうだ。

さっすが、世界有数の実力者が集う闘技場だな！

こりゃ勝つる！

会場の異様な熱気にやられていた俺は、当初の目的も忘れて騎士の闘いに胸を膨らませた——が次の瞬間、長槍焰騎士は何を思ったのか、手綱を引いてクルリと踵を返すと、座席を踏み台に上の階へと跳び上がり、巨像の前からさっさと姿を消してしまう。

『——は？ な、何でだ？』

意味不明だった。

巨像は既に膝を落としていたというのに、なぜ追いつけず、そのまま逃げるように退いたのか？　ほとんど勝ったも同然だったのに……何でだ？

『な、なあ！　これ、いったん退いた方がよくないか？』

状況が飲み込めない場合、とにかく脅威から距離を置くのが最善だと考えた俺は、会場の外へ出ようと信濃川に提案するが、信濃川は平然としたもので――

『三十六計、逃げるに如かずか？　ふふん、弱腰やな少年！』

――首をコキコキ鳴らしながら屈伸を始め、喧嘩上等の御様子。

『おいおい！　いやいやいや！　状況をよく見ろよ！　あの『長槍焰騎士』だって逃げたんだぞ！　相手が悪すぎる！』

『……はあ？　アレって、逃げたん？　……まあ、どうでもええわ。
まなこ眼開いてよう見とき！』

『え……？』

腕をグリングリン回しながら余裕たっぷりにそう言った――信濃川改め掛布は、暴走を再開した巨像に向き直り、背中の中央で交差するように差した赤鞘の長刀を抜いた。

薙ぎ払われ逃げ惑う観衆の中、ただ独りが抜き身の大小を手を悠然と歩み征くその偉容に、誰もが鬼神の姿に目を引き寄せられた。歩きたびに、幾重にも折り重なる薄紅色の刃が耳障りな音を立てる。耳をつんざくような騒乱の中でも聞分けられるような明瞭な音を立てている。

ジャリ、ジャリ、ジャリ……。

いつの間にか、鋼の重なり合う音だけが場内に響き渡り、先ほどまで騒然としていた会場内の空気が凍りついたかのように張り詰めていた。

『ウガ……？』

『飛べや、デカブツ』

巨像の前に無然と立ち塞がる掛布が、そう吐き捨てた瞬間——折り重なっていた幾十もの鋼刃が怒髪の如く逆立った。

解放された逆立つ刃が擦れ合うと、聴くに堪えぬ狂ったような怪音を発生させ、それと同時に——鮮血のように赤く映えた鬼の相貌が、杭のような犬歯を剥き出しに『凶相』へと変わる。暴虐なる鬼が、血に餓えた『戦鬼』へと化わろうとしていた。

解き放たれた荒れ狂う暴刃の雄叫びに射竦められ、血に狂喜する観客すら耳を押さえながら苦悶の表情を浮かべている。

耳朵を穿つ鋼の狂咆。

全身から陽炎のように昇り立つ圧倒的戦氣。

見る者の肌を痛いほどに粟立たせた——鬼の痛烈なる変異。

『グオオオオツ！！』

掛布の咆哮に応じるかのように、巨像の『打ち下ろし右』チョップینگ・ライトが振り下ろされた。

2 m弱の鬼神侍に対し、およそ15 m以上ものアドバンテージを持つ巨軀から繰り出されし剛拳は、まともに受ければ鎧ごと押し潰され、骨片すら残らないだろう。それを——

『上等やッ！』

——掛布は意にも介さず、両足を大きく開き前傾に深く重心を沈め、二刀を右下段に構えた。

『バアアア————スッ！！』

巨像の拳が衝突する刹那、掛布は獲物の喉笛に喰らいつくように一気に膝を突き上げ、右斜め下からの強振にてそれに応じる。裂帛の気迫を込めた掛布の連撃が巨像の怪腕を一度、二度と剃り落とし、弾かれて左へ逸れた拳はスタンドを穿ち抜き、すさまじい粉塵を巻き上げた。

『グルルウ！！？』

立ち昇る黄色い粉塵によって巨像は鬼の姿を見失った。

巨像が腰を落とし粉塵の中に顔を近付けたとき、その無防備な顔面には――鬼の、会心の二連撃が待ち受けていた。

『掛布!!』

ガラ空きとなった巨像の左側頭部目掛け、紅き鬼の双牙が襲い掛かった。岩の如く硬い顔面に刃が滑り、火花を散らせるが、全身を浴びせ掛けるような斬撃は巨像の右目と鼻筋を大きく削ぎ落とし、^{わだち}轍のような痕を深々と刻み付ける。

『グアアアッ?!?!』

『――トドメやッ!!　そして、コイツがあー!!!』

両刀を振り抜いた勢いのまま回転し、鬼が吼えた。

『岡田やッ!!』

珍妙な掛け声と共に鬼は、サイの角ほどもある右膝の突起で巨像の顔をカチ上げた。岩石が高速で衝突したような快音を立て、巨像の顔面が大きく陥没し、顎が浮き上がる。

『――よっしゃ!!!』

その瞬間を狙い、鬼は畳み込むように、両袖から肘の先に展開した刃渡り40cmほどの鯨歯の刃を巨像の首筋に交差するように突き立て、ボロボロになった顔面を抱えるように両足を絡めると、その状態から全身の刃を針鼠のように怒張させた。

――シャカツ!!

顔面に刃を突き立てた瞬間、凜と美しく響く鋼の音色。

数秒の間、場内は水を打った様に静まり返っていた。敵に対し一切の呵責無き鬼の戦い。俺を含め、観客達は呆然と、あるいは陶然と、いつの間にか場の空気に酔いしれていた。

『……………』

巨像は動かなかった。無数の刃に縫い止められて動けないのか……既に生命活動が停まってしまったのか。

『仕舞や』

掛布が静かにそう告げた瞬間、そそり立つ刃が収縮し元の形状を取り戻した。自分を縫い止めていたモノの消えた途端、巨像は轟音と共にその場に崩れ落ちる。

膝を落とし、地に手を着き……眠るように動かなくなる。

『うおおおお!!』

静寂を打ち破るように、周囲から一斉に万雷の拍手が巻き起こった。

圧倒的に体格で勝る戦闘巨像を真正面から討ち倒した鬼神侍の勇猛に、観客達は惜しめない賞賛の拍手を贈る。

この闘技場に集う戦闘狂達は、そのほとんどが一般的には理解されないだろう過激な思想の持ち主。それは時に非情と罵られるだろう……だが闘士には、闘士なりの絶対の美学がある。

それは、『勝つ者こそが正義』という、原始の時代から今に伝わる、地球上の如何なる生物にも通じる絶対原則だ。

強者は如何なる者であろうと賞賛される。勝利した鬼神侍は、掛布は、信濃川古物商は、今このときをもって大闘技場の英雄となったのだ。

自爆とハイエナ稼業

『カ・ケ・フツ!! カ・ケ・フツ!!』

会場の所々に設置されている、オーロラビジョンに映る鬼神侍の勇姿に、数千人もの観衆が一同に立ち上がり、全身を震わせるような掛布コールで盛り上がる。

これが……これが信濃川の持つ力だということのかッ!!
ごすいっ! ごすいよ信濃川!!

『でも、ファンタジーRPGで『掛布』はないよな……? 和名みたいだけど、どーゆー由来の名前?』

『なんや物知り博士! 知らんのか!? 有名な野球選手やで!』
『そうなんだ?』

だが知らんもんは知らん。

さつき、老人から丸パクリしたマイン・コア情報を諳んじたのが効いたのか、俺は信濃川から『物知りさん』に見られてしまっているようだ。でも今は、そんなことどうでもいい。

『……で? 何であんな目立つ真似を!!!!?』

俺は信濃川の肩を揺さぶりながら詰め寄る。

ぶすり

うっかりしていた……刃で構成された肩の装甲が手に刺さって、タクが一瞬にして瀕死状態に。画面が真っ赤になってチカチカ点滅し——現実世界の俺は、自分の間抜けっぷりに顔を引きつらせながら眉間を揉む。

『大丈夫?』

『う、うん……』

通常、手の平刺されたくらいじゃ致命傷は喰らわないんだが、信濃川の装甲には何か毒のような特殊効果があるようで、全身に悪寒を感じているタクはまともに立つことすらできない。

『さ、肩に掴まり!』

『い、いや……そういうのは……いいから、し、痺れを、治してくれ、よ……』

何とか薬草を使って体力を元の状態に戻したが、異常状態はまだ治らず、舌先が痺れているようでボイスチェンジャーが不具合を起こしている。

『ウチ、呪われてて回復系意味ないから持ち歩いとらんわ。バリバリ脳筋スタイルやし魔法も使えへんで。だから、ほらっ、意地張っとらんと素直になり!』

『……うう』

衆目の前で肩なんか借りれるかと、俺は信濃川の手を払うが、ムリヤリ腕を掴まれて引き寄せられた。

ぶすり

『ぐはぁ……!?!?』

『あ……』

身を寄せたとき、わき腹に鬼神侍の刃が深く刺さって、タクが再び瀕死状態になってしまった。しかも今度は目の前が真っ暗に。

『な、なにすんだあ!!!』

『ごめん! うっかり忘れとったわ! あ、回復はできへんで!』

『知ってるよ!!』

さっき聞いたし!

俺は薬草をモシヤモシヤ食いながら怒鳴った。

まったく! 今回は御忍びで来たというのに、数千人もの観衆から一身に注目を浴びてしまった。

おまけに、注目度の高い闘技場での試合は、翌日には公式でネット配信されるので（世界中から常に関心を集めているYMRの有名選手には、何社ものスポンサーが付いていて、Sランカークラスの闘士となると、年に数千万稼ぐのもザラである）、これで行動が大きく制限されるのは間違いない。信濃川は一体、何を考えているんだ？

『うん？ まあ、結果オーライ？』

『何がオーライだろう！ ”オーライ” どころか今すぐ”往来”に放り捨ててやろうか！？』

憤怒の形相で睨む俺に対し、小さく舌を出して乙女のような”シナ”を作る信濃川。可愛い仕草をゴツイ鬼でやられるとキモイことこの上ない。

『まあまあ、シュウちゃん。ええやんか♪』

『し、シュウちゃん言うな……！』

オバQが居候先の子供に接するようなトボけた口調で名前を呼ばれたので、俺は全身がたまらなくムズ痒くなって、それ以上責任を追求できなかった。

魔王と霸王とハイエナ稼業

俺達がコントを続けていると、闘技場で再び大きな歓声が巻き起こった。

総立ちとなって悲鳴にも似た叫び声を上げる狂信者達——それに手を振って応えるのは、正門より悠然と歩を進める白金の重装甲騎士。この騎士こそ多くの闘士を心酔させてやまぬ、ファルンの……いや、世界最強の絶対王者——燐の霸王『バルクロイ・エルガー』だった。

霸王は、初代YMRで登場した神竜——『伝説の白竜』^{ナーガ}を模した『煌白金』^{ミスリル}の白き重装甲に身を包み、”燐”の名が示すとおり、鬼火のような蒼白い燐を常に周囲に漂わせている。そして、もう1つの二つ名、”霸王”が示す意味は、バルクロイ・エルガーが単に民衆に都合のいい英雄などではなく、武力を以って世を支配する破壊者であることを示していた。

霸王は自身が率いる白の軍団と共に、既に二つの国家と十六の都市を破滅に追いやり……ついには、初代霸王であり伝説の武具にも名を冠している『ガイナス・ラグルド』より、その称号を篡奪したという怪物中の怪物。

『王者！！ キング・エルガー！！』

『チャンプラー——ッ！！』

『霸王閣下殿ッ！！』

俺の目の前に現れた生きる伝説が、大きく右の拳を振り上げると、申し合わせたかのように声援が止んだ。一瞬訪れた静寂の中、霸王は天高く突き上げた拳からピンツとひとさし指を立てると、その先を観客席の中央——透明なガラスで覆われた闘技場VIP席へと合わせる。

『……う、皇魔王？！』
ウオッチャー・キング

俺は驚きに目を見開く。なぜなら霸王が指したその先には、魔王

六将の一翼、光滅の魔皇『皇魔王』の姿があったからだ。

皇魔王の背後に並ぶのは、薄絹のケープを纏い日輪の勺杖を持つ——万蛇の『土蛇族』^{カルメン}。三匹の天使の意匠を凝らした黄金の三叉矛を持つ青の守人——『海鱗族』^{ディープ}。両腕を金色の縛鎖によって拘束されているのは、狂える超獣——『獣牙族』^{ワスプ}。こいつらは以前港で見えて知っているが、一番右の……BOX席の最奥に居てはつきりとは見えないが、見たこともないヤツが立っている。

『誰だ……？』

四体目の怪物は……何と言うか、目の錯覚だろうか、特撮ヒーローの仮面ライダーに似ているような気がする。昆虫のような鎧兜に、スポーツカーのような機能美を感じさせる流線型のフォルムをした漆黒の鎧を纏い、深い闇色をした不気味な大鎌を肩に担いでいる。背格好からして人間にも思えるが……全身隙間無く鎧に覆われているので中を窺い知ることはできない。

『ようこそ魔王よ！ どうだ、ファルンでの逗留、楽しんでおられるかな？』

霸王が両手を広げ豪放に言い放つと、眉根1つ変えず観覧席に座っていた皇魔王は、人形のように角ばった口をぱかっと開いた。

『……貴様が人類種の頂か？』

『クク……どうだろうなあ？』

顎に手を当てて一笑した霸王が、己の背中を振り返って見る。

霸王の後方に控えるのは、ブルーラインで縁取りされた白き軍衣に身を包む、魔導連合国家ホートルーアの前司法局局长にして現世界11位——岩壁のように険しい顔で口をへの字に固く結んだ身の丈2m強の巨漢、世界最強の雷撃使い『ライトニング・アルコニー』。

そしてその右隣には、現世界35位——頭から爪先まで黒いゴムチューブをビチビチに巻きつけ、両手を封じ、4m近い棒状の細い脚で立つ謎の怪人、斑蜘蛛の『ガンマ・ライン』^{マダラグモ}。

ライトニングは一度霸王の軍門に下ったとはいえ、『最強の雷撃

使い』という大看板は未だ健在であり、一軍を灰燼に帰すほどの魔力を持ち、ガンマ・ラインは最近頭角を現した無敗のSランカーで、コンパスのような細身の矮躯から繰り出される頭上からの刺殺殺法は、未だかつて破られたことはないらしい。

確かに……霸王が言うとおり、この怪物二人を交えれば、最強の称号が誰の手にあるか疑問が浮かぶだろう。

『エルガー！ おまえが最強だー！』

『魔王なんて殺っちまってくれえー！！』

黙って事態を眺めていた観客席から穏やかでない声が上がる。魔王と霸王との邂逅……特大のイベントが起きるやもしれない前兆に立会い、誰もが冷静でいらなかったようだ。

しかし、仮にも同盟を結んでいる相手を殺せだの、ハラワタを引きずり出せだの、目玉やイチモツを切り取ってくれだの、まったくもって性質の悪いヤジだ。当の皇魔王は冷めた顔をしているが、配下の三匹は主への中傷に殺気立ち、今にも飛び出さんばかりの険しい顔をしている。ライダーは腕組みのまま静観しているようだが、いつ火種に引火してもおかしくない緊迫した状況になってきている。『こりゃ、ただじゃ済まないぞ……』

特A級の魔王とその直属の部下ならば、霸王や上位ランカーを含めたこの場に居る闘士全員を相手にしたとて引けを取るものじゃない。戦いが始まれば、俺のような弱者などあつという間に駆逐されてしまうだろう。分かり易いくらいの地獄絵図が見える。

『……おい、信濃川！』

巻き添えくらったたらたら。やることはやったし帰るべきだと、俺は信濃川の背中を……刺さらないよう注意して突ついた。

信濃川が不機嫌そうにこっちを向く。

『なんや？ 今ええとこなのにく……！』

『馬鹿！ 目的を忘れんなよ！ いくらおまえでも、あの化け物相手に俺は護れないだろ？ おっ始まる前にとっとと逃げるぞ！』

『ン……確かに、広域殲滅魔導とかやられたらかばいきれへんな

あ。ウチは呪われてる分、魔法耐性があるけど、でも、シユウちゃんかてタンタナやん？ 精霊の加護あるんちゃう？』

『いや……これは、違うんだよ！』

忙しくてすっかり後回しにしていたが……俺はまだ、半裸に葉っぱの仮面一丁のタンタナ族に偽装したまんまだった。

タンタナとハイエナ稼業

こんなアホみたいなのが恰好して騎士だと言うのも無茶な話だ。

面倒だから『調査^{アセス}』でも掛けさせて職業を見せるか？

『ホウホウ……』

そんなことを考えていると、遠くから聞き覚えのある声。

声の元を追って見ると――向かいのスタンド席にいる三人組のタンタナが、なにやら仲間にしたような熱い視線をこちらに向けていた。

『……ハッ！』

俺はそれを鼻で笑い、信濃川を見習ってビシッと中指で応対してやる。

『ホウホウ！？』

『ホウホウ！　ホウ！！』

タンタナは当然の如く怒って何やら抗議の声を上げるが、信濃川がうっとうしそうに『ああん！？』と言って睨みつけると、叱られた子供のようにサツと首を引っ込めた。

つ、強エエ……！

勇猛果敢で知られるタンタナをひと睨みだ。

これなら信濃川の言うとおり、あの派手な喧嘩もまったくの無駄だったとは言えないな。

だが……その信濃川ですら、S級レベルに入るかどうかと言えば、正直厳しいと言わざるを得ない。信濃川の戦闘は凄まじいものがあったが、それはあくまで人間としての範疇。豪腕を振り、力で巨像を捻じ伏せたが……あの舞台に立っている化け物どもの前では鬼ですら霞む。

会場の最上に位置するVIPルームの強化ガラスを打ち破り、100m以上もの高所から落下して難なく闘技場の舞台に飛び入った闇の眷属三体は、覇王を中心とした三人のSランカーと向かい合う

形で、主人の号令を今や遅しと待ち構えていた。

『クク……!! 丁度……三対三という具合の良い図式が出来上がっているが……さて、どうだろうか、皇魔王よ? 構わないかな?』

凶暴な笑みを抑え切れぬ霸王が、口元を押さえ歓喜のあまり小刻みに肩を揺さぶりながら皇魔王を仰ぐ。

『構わないよなあ? なあ?』

霸王はプレゼントの包みを開く子供のようにウキウキと、部下のライトニングが仏頂面で自重するよう嗜めるのも聞かず、獣牙族の牙の届く位置まで無警戒に近付く。

公式によると霸王の身長は2 m 70 c mあるそうだが、霸王を眼前にして雷鳴のような唸りを上げる獣牙族は3 m以上もあり、その戦闘力は20 m級の竜族や下位の魔王に匹敵するらしい。

ライトニングとガンマ・ラインの前に立つ土蛇族と海鱗族もおそらく同等クラスと見るべきか……明らかに人類が単独で勝ち得る範囲を超えたモンスターだが、それを前にしても霸王の自信は微塵も揺が無い。

殺せ! 殺せ! 殺せ!

一触即発の雰囲気興奮し、会場が一体となって地鳴りの如き”キル・コール”。座席がビリビリと震えるほどの大音量が会場を燃え上がらせる。

『おいおい、マッド・マックスかよ……!!? 信濃川、聞こえるか!?!』

『――』

信濃川が首を振りながら手でバツテンを作る。

また通信が混線を始めたようだ。

狂乱の殺戮者とハイエナ稼業

個人回線はあきらめて闘技場専用チャンネルに周波数を設定した。これで信濃川との会話は身振り手振りに限定されるが、途切れ途切れで聴こえなくなっていた舞台とVIP席付近の会話はノイズ混じりに復活する。何も聴こえないならこの方がマシだ。

会場が固唾を呑む中、皇魔王は細い指先を伸ばして虚空に大きな円を描き、その円の中に文字を書き込み始めた。

『――イイヨ』

皇魔王が文字を書き終えて指を引くと、描かれた軌跡をなぞるように蒼白い炎が時計回りに灯り始め、円の中に”K”という文字が生まれた。その図が示す意味は確か、魔族間で主に使われている――「挑戦を受けて立つ」という契約の証である。その前に「イイヨ」と言ってるが。

『――おおっ、どうやら主の許可が下りたようだぞ！ クックック……重畳重畳！ この上なし！ さあ、どうする？ どうやる？』

”闘技場（この場）”の儀礼に則り一対一の闘いを望むか？ または変則的に三対三のバトルロイヤルとするか？ クク……こちらは如何様にも応じるがな！』

霸王はしきりに手を擦り合わせながら満足そうに歩き回る。

一般的な支配者にありがちな泰然自若としたイメージと掛け離れ、霸王は強者たる落着きなど微塵も持ち合わせていなかった。

好奇心旺盛で好戦的。

一分とて同じ場所にいることはない。

まるで子供だ。

霸王という存在は、ある時代では時の魔王よりも人類の血を流した破壊の化身でもあるが、バルクロイ・エルガーの人氣がプレイヤ―間で「大好き」か「大嫌いの」二極で語られるのは、彼の思考がシンプルで嫌らしさが無いからだろう。

要するに、俺とは真逆の存在だな。

『ギョギョギョギョオーッ！！』

三匹が顔を合わせて相談しているのを見て突如、ガンマ・ラインが仕掛けた。闘技場全域にキーンと響くような高音域の奇声を上げ、直立の状態から何の溜めもなく一気に数十メートルも垂直に跳び上がる。

『――死ネヤアアッ！！』

三匹の頭上を完全に捉えたガンマ・ラインは、一度空中で静止した後、獲物を狙う猛禽の如く急降下し、昆虫のように黒光りする長尺の両足から豪雨のような突きを繰り出す。

マシングンの掃射に等しい無差別攻撃は三匹のみならず周囲の全てをも巻き込み、小麦をバツと散らしたかのように粉塵を巻き上げ、舞台の視界を完全に奪い去った。

『――！！』

信濃川が興奮した様子で何かを叫んだようだが聴き取れない。

あわてて舞台に視線を戻すと、濛々と立ち込める粉塵の中を一気に突き抜け、ダラリと下がった左腕から夥しい血を流す土蛇族がスタンドに立つ。

『――砂蛇地獄！』
ア・シルト

土蛇族はスタンドの上でしゃがみ、人差し指と中指で複雑な印を素早く切ると、全身から青紫色の禍々しい光を浮き上がらせた。

『ゴホゴホッ！ お、おい！ まだ始まってなからうが！！』

霸王が粉塵を手で散らしながら出て来た。

霸王は、大規模な召喚魔導の詠唱を始めた土蛇族に非礼を詫びながら、手に持っていた日輪の杖を放って返す。

『――ギギッ！』

立ち上がり錫杖を受け取った土蛇族は、傷ついた左腕に日輪を象っている部分をかざす――すると金色の淡い光輝が全身を包み、無数の傷口が瞬く間に塞がった。

遺恨無き正々堂々とした戦いを望んでいたのだろう霸王は、それ

を見てホッとした様子で肩を落とす。

『ギョギョギョギョッ!!』

だがその弛緩した空気を嘲笑うかのように、粉塵の中から空中に飛び出して来たガンマ・ラインは、扇風機のような音を立て、車輪のように回転しながら土蛇族を襲う。

『――蛇^{ジャッ}!』

土蛇族はそれを寸でのところで回避するが、直撃を受けたスタン
ドが削岩機にでも巻き込まれたように粉々に碎け散り、大小様々な
破片が高速で周囲の観客達を襲った。

八頭蛇の金鎖

黒き暴風に巻き込まれ、屈強で通る複数名の闘士達が、武装ごとミキサーに掛けられたように肉片となって飛び散った。人の原型を留めぬ赤い血肉がベチョベチョと観客席に降り注ぐ。

『ヒャツキャツキャツキャツ!!』

同業者を十人ほど挽肉に変えたのに悪びれもせず、癪癪を起こした子供のように甲高い奇声を上げる黒の悪魔は、舞台へエスケープした土蛇族を高めから睥睨するように直立する。

『キャツキャツキャ!! アーッキャツキャツキャツ!!』

そして、瓦礫に挟まれ身動きの取れぬ闘士達の頭を、無造作に脚の尖端でズコズコと貫き、さらにいつそう高笑い。

おいおいおいおいおいおい!!?

もはやどっちが悪の手先なのか判らない。

ガンマ・ラインの神をも恐れぬ超暴虐ぶりに、さすがの信濃川も呆気を取られている様だ。

一方、濃密な粉塵が漂っていた舞台中央では、視界が少しずつ晴れてきて、霸王とライトニングのシルエットがうつすらと浮かび上がってきた。

『ね、ねえっ! 何でアイツ勝手に闘ってんの!? 何で観客殺しちゃってんの!? まだ開始じゃないのに!』

『フム、アイツは話を聞かないからな』

霸王が萌えっ子よろしく「はわわっ!」となっているのを横目に、腕組みしながら落ち着いた様子で答えるライトニング。さすがは元王者。貫禄がある。

というか、霸王はここまでいいとこないな。イレギュラーに対応できなくて、即座にライトニングの許に駆け戻ったし。

『――漣ッ！』
さざなみ

両雄の会話を遮るように勇ましい声が響くと、薄モヤを一直線に突き抜け、細く集束された水流が光線のように霸王達の間を貫いた。水流はレーザーのように大地を切り裂きながら走り、観客席の半ばまで寸断してようやく途切れた。

『水……海鱗族か！』

霸王は巨軀に似合わぬ俊敏さで後退し距離を置くと、煙の中に揺らめく海鱗族の影を振り返り、ジッと待ち構える。

『クク……さあ来い！』

『ゴアアアアアアッ！！！！』

だが誰何の声に応じたのは、爆音の如き獣の咆哮。

全身の皮膚を激しく震わせ、聴く者をその場で射竦めるその苛烈な声は――鮮やかな青い体毛をなびかせた、虎縞の獰猛なる巨獣、獣牙族であった。

『クッ！？』

予想外の相手に霸王の反応が数瞬遅れる。大地を粉碎するようなとてつもない踏み込みから瞬きの間に距離を詰めて来た獣は、岩のような肉厚の肩口を突き出し、シオルダー・タックルを繰り出して来た。

『むうん！！』

戦艦の主砲に等しい破壊力のそれを霸王は真っ向から受け止める――が、体重差がありすぎて獣牙族の猛進を一瞬たりとも留めることができない。踏ん張った両足からグライNDERのような火花が散る。

『――”八頭蛇の金鎖”！！』
ナンバー・エイズ・ヒュドラ

500kg以上もある重武装騎士をスタンド近くまで滑走させた獣牙族は、両の腕に巻き付く金色の鎖を霸王に向けて解き放った。

鎖は太陽のように一瞬だけカッと輝くと、硬度を増したかのように直角に伸び――そして、まるで獲物の前で鎌首をもたげる蛇のよ

うに、覇王目掛けて襲い掛かる。

弁達者とハイエナ稼業

『ガアアアッ!』

霸王が獅子のような咆哮を上げた瞬間、滑走を続けていた両足の裏が「ドムッ!」と爆発した。

衝撃が闘技場を上下に揺らし、爆発は霸王の足裏から連鎖的に掌にまで伝って――獣牙族の巨体を天井高くまで突き飛ばした。

『ゴガハアッ!?!』

手足をばたつかせ大量の血を吐き散らかす獣牙族。爆発によって鋭く突き出された霸王の掌が、右肩と左の胸板を深く陥没させたことによるものだろう。

獣牙族は為す術もなく猛スピードで墜落する。

――ドオオオオンッ!!

『ガハアッ!!!』

地面が陥没するような威力で大きくワンバウンドした獣牙族は、咯血しながら二度、三度と地に叩きつけられ、身じろぎもできぬ状態で横たわる。

『ガ、ガ、ギ……』

獣牙族は呻きながら完全に白眼を剥き、ビクビクと小刻みに震え、唾液に塗れた長い舌を口の端からだらしなく垂らしていた。

……終わったのか？

俺はひとりごちると、肩を落とし大きく安堵の息を吐いた。

いつの間にか握り締めていた手は汗でビッシヨリだ。

自軍の不意打ちから始まった闘いで、根が真面目な霸王はかなり精彩を欠いていたが……蓋を開ければ一撃か。まぎれもない圧勝だ。

それにしても、獣牙族を弾き飛ばしたアレは何だ？

覇王の足元が爆発したかと思えば、何トンもある獣牙族が猛烈な勢いで上空に突き飛ばされていた。鎧の各接合部が黒煙を上げているのを見て、爆発が足から掌へ伝ったのだと推測したが、実際には目にも止まらなかった。

『うーん』

俺が深く黙考していると、前の席に座っている『解説のジジイ』が、怪しげな含み笑いを浮かべながらスツと立ち上がった。

ジジイは俺に振り返り、何か言いたげな様子で耳元をトントンと叩く。

……ン？ 何？

解説するから回線合わせろって？

まあ……さっきの混線で会場のほぼ全員が舞台にチャンネル合わせているだろうから、今のタイミングなら逆に通常回線の方が空いてるかもな。

俺は隣に立つ信濃川に手振りで変更の旨を伝え、チャンネルを通常に戻した。間もなくして、ノイズ混じりにジジイの声が聴こえ始める。

『――フオッフオッフオ……”覇王爆震”。まさか、こんなところで拝めるとはのう……』

『な、なんだってエー……ッ！？ し、知っとるんかッ！！』
『ウム……！』

まるで『キバヤシ』に世界滅亡の話でも切り出されたかのような勢いで信濃川が問うと、ジジイは満足気に大きくうなづく。

山のように出版された攻略本や有望な攻略サイトを漏れなくチェックしている俺の知識すら軽く凌駕し、先の屈辱を晴らすが如く、ジジイの弁が冴え渡る。

『霸王は、装甲の関節部に仕込んだ高性能の指向性爆薬を自在に操る！　そして、爆発によって発生したエネルギーを推進力とし、一瞬だが怪物並の剛力を発生させることができるのじゃ！　無論、爆発に耐える強固な装甲とそれを支える肉体に加え、音速をゆうに超えるエネルギーを余すことなく連動させ力へと転じる、神懸りのなセンスが必要じゃがな！』

『おぉー！』

『それはすごい！！』

俺と信濃川は素直に拍手。

ホント、何モンだジイさん？

『イエーッ！　ここでエー、暇を持て余してる前王者、ライトニングにインタビューしてみませうッ！　どーだいライトニング！　調子の方は？』

『フム、別に暇を余してるわけではないがな……』

まだ決着がついてないというのに、舞台では、さっき会場で大演説かましたDJ『マイク・マイクマン』が舞台袖からヒョコヒョコ戻って来て、拡声機能のある自分の頭をズイッとライトニングに寄せる。

だが、腕組みのまま泰然としているライトニングはそれを黙殺し、澄んだアイス・ブルーの瞳をギョロリと見開き――三叉の矛を手に微動だにしない海鱗族を牽制していた。

ライトニング・アルコニー

『……』

ライトニングとの視殺戦を続ける海鱗族を見て、ジジイが再びスツと立ち上がった。

どうやらまた解説を始めてくれるようだが、DJが出た時点で俺らは既に回線を舞台に戻していた。

『——！！ ——ッ！！』

口パク状態じゃ何言ってるかさっぱり分からん。

ありがとう……解説のジジイ！

もう会うこともないだろう！

さらばだ……解説のジジイ！

『……来い』

ライトニングが割れた顎をしゃくろ。

状況を静観していた海鱗族はややあって、矛の柄で地面をゆっくり「トン、トン、トン」と三度打った。

まるで力を込めたように見えなかったが、その打突によって地面はボコツと大きく割れ、割れ目から大量の水が間欠泉のように噴出した。

『——”水螺”^{ル・ラド}！！』

水飛沫を上げる噴水は、海鱗族の唱えた術によってトグロを巻き始め、巨大な法螺貝のような形状へと変わる。

間もなくして噴水が止まった。

宙で静止している半透明の物体群は、海鱗族の構えた矛が再び地面を突いたのを合図に、ライトニングに向けて1つ発射された。

尖端をドリルのように回転させながら解き放たれた緩慢極まりない”ソレ”は、ライトニングの頭上高くを通過して舞台に着弾。

——と同時に、凄まじい大爆発を起こす。

閃光を伴わぬ、突風のような衝撃波が観戦用の大型モニターをコナゴナに破壊し、支柱を押し倒し、立ち見客をドミノのように根こそぎなぎ倒す。

俺のタクは、遠くで観戦していたにも関わらず衝撃の余波でバイタルを急激に上下させ、内臓が浮き上がっているかのような異常値を叩き出した。

『ぐはっ！？ マジかよ！？』

眼が覚めるような破壊力だ。

明らかに先のガンマ・ラインの比ではない。

海鱗族は間を置かず、継いで二発、三発と——柄で地面を打ち、水の砲弾を解き放つ。

全てを制圧する圧倒的破壊力を秘めた上空からの多面攻撃により、舞台上はナパームの猛爆を受けているかのような爆音と土埃を上げ、ライトニングはおろか霸王や獣牙族までも呑み込んだ。

解説魂とハイエナ稼業

舞台が濃厚な爆煙に包まれ、全てが終わったと思ったとき、ライトニングが煙の中から何事もなかったかのように歩み出る。

ライトニングの登場に大きな歓声が沸き起こった。

霸王のように愛想よく歓声に応えることなどしない、ストイックで愚直なライトニングは、厳つい顔でうっとうしそうに煙を手で払うと、衣服に埃を付けた海鱗族をジッと一瞥し――呟く。

――”巨神竜の轟雷”^{テンベスト}。

瞬間、世界がホワイトアウトした。

視界が完全なる白に染まり、それに遅れること数秒、無数の爆雷が降り注いだかのような轟音が鼓膜を震わせた。

キーンと耳鳴りがする中、俺はうっすらと見た。

巨大な雷の雨が海鱗族と大地を容赦なく打ち砕いたのを。

山の如き巨頭が雲の上にまで届くと謳われる雷の化身――巨神竜。その力を喚び寄せ解き放つ雷撃の嵐は、舞台をキレイさっぱり消し飛ばした。大気は未だ鳴動し、跡に残るは無尽の荒野のみ。

『……』

俺は腰を浮かせて逃げる準備を整えた。

もう観戦とかそういうレベルじゃない。

闘技場は完全に戦場と化している。

『ヒヤッハー！ ホント、戦場は地獄だぜえー！！』

『ギョッギョッギョッ！！』

その一方、完全に目的を見失って、観客を片っ端から殺しまくっているガンマ・ラインが、重火器を装備した陸戦仕様の武装巨像――『隕鉄の巨像』に眼を付け、場外乱闘を始めている。

肩に乗せた『軍曹』と共に迷彩色に彩られた巨像は、ガンマ・ラインに合わせて右拳を突き出し、鋭いモーター音を響かせながら、手首に内臓された十六連装アーム・バルカンを回転させ掃討に掛かる。

『アキヤアッ!!』

被弾しながらもまったく意に介さないガンマ・ライン。独楽のように片足立ちでクルリと回転し、遠間からのミドルキック一撃で巨像を真っ二つに砕いた。

『う、うわあっ!?!』

そして、地面に投げ出された軍曹の頭を空中でタイミングよくズコツと一突き。顔面を貫かれた軍曹は膝を着いて絶命した。

か……解説するか!?

俺は胸が無性に熱くなるのを感じて、信濃川の肩をポンと叩く。
真剣な眼で解説したい旨を訴えると、信濃川は回線のチャンネルを変更してくれた。回線がさっきから行ったり来たりだ。

『クッククク……まさか、あの巨像に見え得るとはな!』

『あ……えっと、しっとるん?』

『ウム!』

場所を選ばぬ縦横無尽の超人バトルの方がえらく気になるのか、信濃川の反応はイマイチ。

だが……ジジイの遺志を受け継いだ俺が解説をやめるわけにはいかない。前の席のシヨボイ老人が『すんの? 解説すんの?』と、首をかしげ不思議そうにこちらを見てるが、やめるわけにはいかない。

『隕鉄の巨像とは、信濃川ですら表層を削るのがやっとなかった『岩塩の巨像』より、七ランクも高い硬度と戦闘力を誇る怪物だ!!』

『お、おー。それはすごい』

パラパラと拍手する信濃川。

まあでも、そんな凄い巨像さんが、S級相手じゃゴミ扱いだな。

星座の神話とハイエナ稼業

『悪ハ子ハイネガ？ 悪クナイ子モイネガ？』

ガンマ・ラインが妙なことを口走りながら、バツタのようにピョンピョン跳ね回る。観客は次々に追いついてられ、もう3分の1くらい退場していた。

血と騒乱を好む荒くれ者どもにしては情けない、と思うかもしれないが、闘技場での死亡ペナルティは、通常の、金や装備品を失う罰に加え、その場でしばらく死体役を担わなければならない上に、闘技場への出入り禁止措置が付く。

金も持たず、闘技場に縁も無く、ちぎった葉っぱ数枚装備してるだけの俺なら死んでもどうということはないが、絶対王者の覇王が登場したことで闘技場の入場者数が鰻上りの現在、人数調整のために禁止期間が1ヵ月にも延びている現状を鑑みれば、ワリに合わないといと逃げ出すのも納得いく。

『きゃあ！』

絹を裂く女性の悲鳴。見ると、顎下の欠損した髑髏を被る『死を招く妖精』が、我先にと逃げ惑う観客に押され、通路に投げ出された。

『ギョギョッ？』

獲物を生かさず殺さずメッタ刺しにして遊んでいたガンマ・ラインがその音に反応し、まるで妖怪のように首をグルリと真後ろに向ける。

『クッ……！』

ガンマ・ラインに組み伏せられ、瀕死の状態で喘いでいた戦士は、万物の名を冠した銀の鎧に身を包むソルジャードリーム、『お箸の白銀闘士』だった。

まあ実力は置いといて、世界に1つだけの希少ジョブだ。

常にお箸を正しく持つ、しつけの行き届いた白銀闘士は、ガンマ・ラインの気が逸れてるのを見て、その隙に逃げようと這いずり出す。だが匍匐で階段近くまで辿り着いた瞬間、ガンマ・ラインはコンパスのようにカパッと両脚を開き、四股を踏むように白銀闘士の無防備な背中を突き刺した。

『——くあっ!?!』

背中を貫かれた白銀闘士の体がビクンと跳ねる。

白銀闘士は自身の代名詞たる「お箸」を落として、トマトを噛み潰したように「ガフツ!」と喀血し、腸がはみ出しかけた腹を押さえながらゴロンと仰向けになり、力なく自嘲めいた笑みを浮かべた。『へへ……もつと、もつとさ、おいしいもん食べたかったな……』

闘いに明け暮れた戦士の孤独な死だ。

偉大なる戦士の壮絶な死に……俺は言葉を失い、その孤高なる姿にいつしか自分の姿を重ね合わせていた。

『ギャハッ!』

だが感動したのもつかの間、ガンマ・ラインはその頭を無慈悲にもズコズコ貫き、眼球と脳漿をビチャビチャ飛び散らせながらゲラゲラ哄笑を上げる。

ク、クソ! 悪魔めッ!!

俺と信濃川は残酷な現実を正視できず「クッ!」と眼を逸らす。

まあ、明日には生き返って元気してるだろうが。

今日の日はさようなら。

悪魔とハイエナ稼業

『助けて……誰か!』

『ギョッギョッギョッ!』

白銀闘士の頭部を団子のように脚に突き刺したまま、コツコツと杖をつくのような音を立てて歩き、その場にしゃがみ込んで身動きの取れない『死を招く妖精』の前に立つガンマ・ライン。

恐怖に彩られた愛らしい少女の顔をのぞき込み、ゴムベルトに覆い隠された悪魔の顔が喜悦の形に歪む。

『クソ……どうにもできないのか!』

俺は唇を噛んだ。

非力な俺のタクじゃ状況を見守る以外にできない。

もし俺の立つ世界が都合のよい物語なら、ここで正義の味方が登場して、敢然と悪の前に立ちふさがるというシーンになるだろうが……。

——ズコッ!

祈るような気持ちで正義の味方を待ったが、次の瞬間、妖精の美しい顔が、ボールを顔面に受けたギャグマンガのキャラみたいにくんでいた。

だが、それだけでは済まない。

ガンマ・ラインは、妖精のやわらかそうな腹を脚の尖端でスツと引き裂き、開いた割れ目をグイッと拡張、まだ微かに動いて照り返している、鮮紅色の内臓や腸をパスタのように脚に巻き付け、ブチブチ引きちぎって、打ち水のようにバツと観客席に撒いた。

『ヒィィッ!?!』

『うわああっ!?!』

頭から大量の臓物を浴びせられた観客達は狂乱し逃げ惑う。

会場の空気がさらにおどろおどろしいモノへと変わった。

『ギョッギョッギョッ！ ギョーッギョッギョッギョッ！』

ガンマ・ラインはそんなこと構わず、無邪気な子供のように、殺した闘士達の腸を撒く。ちぎった頭を放る。それを見て、ゴシック・ロリータのような衣装で着飾った少女の一団が、応援のプラカードを掲げ、熱狂しながら嬌声を上げている。

『キャー！ ライーン！ わたしにも掛けてー！』

『愛してるうー！』

『殺してエー！ みんなブツ殺してよオー！！』

ハッハッハ……なるほど。

狂ってやがる。

俺はこの異常な場に対する理解を放棄した。

もう笑うしかない。

ガンマ・ラインが暴れているのが向かい側のスタンドだからまだいい。俺達はまだ対岸の火事のように事態を落ち着いて観ていられる。ときどき衝撃波が来てダメージを受けるけど。

『なんやアイツ？ 『うしまた』かいな？』

ガンマ・ラインの凶行を観て、信濃川が心底呆れた風に言った。

『関わらない方がいいぞ』

『せやな』

絶対に絶対に関わるべきじゃない。

アレは狂人だ。

『フォッフオッフオ……。そろそろ解説が欲しいかのう？』

『ジイさん？』

解説のジジイがいつの間にか俺の隣に来ていた。

居残りを決めているキモの据わった闘士達は、避難民の多さから混線の心配が無くなったと察し、すでに回線をオープンに戻している。俺も信濃川も。解説のジジイもそうしているようだ。

正義の光とハイエナ稼業

『フオツフオツフオ……『ガンマ・ライン』か。やっかいなヤツが出たもんじゃのう……』

『し、しつとるんか!?!』

『いや、それもういいから』

もはや様式美と化しているが、芸人魂のある信濃川が律儀に驚くと、解説のジジイは遠い眼をしてうなづく。

『ガンマ・ラインはな、かつて北大陸を支配していた魔王、『ビルド・オルマ』を打ち倒した伝説の勇者じゃ』

『ビルド・オルマ?』

俺は頭の中で、『ビルド・オルマ』という単語を反芻した。

ビルド・オルマは、前作のYMRで登場した魔王だ。

地・水・火・風を司る四魔神の統括者であり、体長15m前後と魔王にしてはかなり小柄な方で、空母のようなとてつもない火力とジェット機のような高機動力を合わせ持ち、その姿を一言で表すなら、『モビルスーツ』みたいだったとか。

『ビルド・オルマ』に挑戦した冒険者達は、当時のラスボスである魔王『ヴィルザーク』よりも遥かに強かったと評しているが、その最強の魔王を討伐した『勇者』——または『勇者達』が名乗り出なかったことで、三年近く経った今でも魔王討伐の懸賞金は宙に浮いたままである。

『ガンマ・ラインが『ビルド・オルマ』を倒した勇者だったとして、何で名乗り出なかったんだ?』

ビルド・オルマの懸賞額は2千万ドルだ。

辞退するというのはちよつと想像できない。

『仲間割れじゃよ……』

『仲間割れ?』

『さよう。冒険者が報奨金をめぐって身内同士で争うというのはよ

くある話じゃ。じゃが、金だけならまだええ。分配できるからな。だが、それがたった1つの……、唯一無二の物であったなら……」

『争いが起きると?』

『さよう。『ビルド・オルマ』を討つことで現れた、ある武器をめぐって、ガンマ・ラインとその仲間達は骨肉の争いを始めた。互いの実力が拮抗し、魔王戦直後で疲弊していたこともあって、そのときは決着がつかず勝負は流れたが……『ビルド・オルマ』を倒したという証である『重力芯』は、戦いの最中に”氷の割れ目”^{クレバス}に呑み込まれ、行方知れずとなってしまった』

『……へえ! そないなことあったんやなあ!』

信濃川はジジイの解説を素直に信じたようだ。

俺はというと……半信半疑だ。

ビルド・オルマ消滅の真相は多々あるが、能力値を高くしすぎてゲームが進行しなくなったから、すでに完成していた次世代システムの投入を図りたい公式が、密かに介入して消滅させたという話が一番有力で、俺もそう思っている。解説のジジイの話はおもしろくて、一家言あると感じるが、やっぱり証拠がないことにはな。

一方、舞台はライトニングの高位殲滅魔導の影響で、真っ白なスチームに包まれていた。降り注ぐ稲妻の超高温によって、水螺の構成に使われていた大量の水が一瞬の内に蒸発したことが原因だ。

舞台全域はドライアイスでも溶かしてるみたいに白く染まり、客席下段の、かぶりつき席に陣取っていた熱狂的な闘士は、逃げる間もなく高温のスチームに呑まれ、そのほとんどが焼死している。

術者のライトニングもこれほどの余波は予測できなかったか、完全にスチームに呑まれて姿が見えなくなっている。おそらく死んでいるだろう。

『ギョッギョッギョッ!!!』

そして、後に残ったのがあの狂人だ。

ガンマ・ラインは、小太鼓を持つ少年とも少女ともつかぬ端正な顔立ちの楽士を嬉々としながら追い立て、もてあそぶ様に膝裏を突きながら、最後に衣服の裾を踏みつけて転ばせた。

『あうっ!?!』

ころんだ拍子に太鼓が転がって行く。楽士は手をのぼして追うが、ガンマ・ラインの足がそれを踏みつけた。

あいつ終わったな……。

奇跡など起きない。

さつきよくわかった。

だが、そんな絶望的状况で……。

ついに正義の味方が現れた。

『――待てエェいッ!!』

『ギョッ!?!』

黒き二足の悪魔が、涙目で震える楽士の少年に、今まさに足の尖端を振り下ろそうとしたそのとき――爆音と共に煙の中を突き破って、霸王バルクロイ・エルガーが登場した。

巨神竜の轟雷によって完全に沈黙したかと思われていたが、まさかの戦線復帰。例の『霸王爆震』とやらを利用した跳躍なのか、脚部から黒煙を撒き散らしながら大きく飛翔した霸王は、ガンマ・ラインの立つ通路中央目がけ一直線に、傲然と腕組みしながら降り立った。

――ボゴンッ!!

半トンを超える着地の衝撃で通路は大きく陥没し、土台を失った上下の座席が雪崩のように滑り落ちる。

『ぎゃー!?!』

ザザザと流れる椅子の雪崩に巻き込まれ、何人かの闘士がスチ

ーム地獄の舞台へと放り出された。

『……よし、無事なようだな少年ッ！　ふうっ！　間に合ってよかったわい！　さあ、これ以上の無法はワシが許さんぞ！』

『ギョギョッ!?!』

いや遅いよ!?!　少年以外にだいぶ死んでるよ!?!?
そしていま、自らの手で新たな犠牲者を出したよ!?!?

巻き添えによって地獄へ投げ出された闘士を横目でチラッと見たにもかかわらず、「来てやったぞ」と言わんばかりに偉そうな口上の霸王。ガンマ・ラインですら戸惑う忘却力だ。

『さあ、それ以上の無法は許さんぞガンマ・ライン!?!』

『ギョギョオッ!?!』

他の誰が言ってもいいがおまえだけは言うなといわんばかりに、怒かりに震えるガンマ・ライン。俺もそう思う。

太陽王の籠手

無言のまま睨み合う両巨頭。

混じり気なしの本物の殺気が二体の怪物の間で炸裂し、遠くで見ているだけなのに空気が固形化したかのように重苦しく感じる。

ふと気付くと雑音が止んでいた。

『ウオオオオオオオッ！！』

覇王が動いた。『ピーカブースタイル（前傾に腰を落とし、逆手に構えた両拳で口元を隠す）』に構え、怒声を上げながら気迫を込めると、シリンダー錠のように縦一列の輪で構成された両腕の装甲が、石臼のような音を立てて回転を始めた。

歯車のように回転する輪は太い上腕のスペースに収納され、剥き出しとなった前腕の装甲下からは、眼にもまばゆい黄金の籠手が現れた。

『ギギ……ッ！！？』

それは太陽のように熱く鮮烈な光を放ち、真正面から光を受けたガンマ・ラインは眼をくらませ、バランスを崩しヨロヨロと後退する。

そして、ガンマ・ラインが階段の段差に足を取られた瞬間、覇王は拳を振りかぶった。

——ドンッ！！

覇王の脚部が爆発し、通路が爆砕したかと思えば、眼にもとまらぬ音速の右拳がガンマ・ラインの下腹部を貫いていた。

『——ヒ、ヒギッ！』

『——ドオオラァッ！！』

ガンマ・ラインを貫いてなお覇王の拳は留まらず、通路を粉碎しながら驀進し、皮一枚でギリギリ繋がっていたガンマ・ラインの下

半身が風圧でちぎれ、腸が糸コンニャクのようにののようにドバドバと飛び出す。

『――ヌオラァアアッ！！！！』

絶命したガンマ・ラインの首が後ろにガクリと落ちると、覇王はそれを大きく振りかぶり――『覇王爆震』。

覇王の肩が超高速で振り下ろされ、そのまま地面に叩きつけられたガンマ・ラインは、体内で爆発が起こったかのように跡形も無く弾け飛んだ。

うおおおおおおっ！！！！！！

肉片ひとつ残らず微塵に砕け散ったガンマ・ラインと覇王の勇姿を見て、客は総立ちとなって大歓声を上げる。

『ついに出たぞ！！ 覇王の魔拳――『太陽王の籠手』！』
ナンバー・ファイブス・ガントレット

驚きと興奮のあまり立つことすらできない俺の横で、解説のジジイがガタツと立ち上がった。

『し、しっとるん！？』

そして信濃川も立ち上がった。

刹那の瞬間とハイエナ稼業

霸王の激勝に湧き立つファルン大闘技場。

まさに最強の看板に偽りなし。文句なしの大勝だ。

『ウオオオオオオオオオオオッ!!』

未だ関節部から濛々と黒煙を上げる霸王が、金色に輝く右の拳を突き上げると、会場はさらなる熱狂に包まれた。

大歓声の中、唯一難を逃れた天井のオーロラビジョンでは、先の激闘のスロー再生が始まっている。

『……』

俺は周囲の熱気をよそに、画面に注目していた。

通路で対峙する霸王とガンマ・ラインの姿が映し出されている。

爆音と閃光と共に霸王の体が霞む。金属の塊に等しい『煌白金装^{ミスリ}甲』の巨体は、カタパルトで射出されたようにトップスピードで飛び出し、たちまちガンマ・ラインに肉薄——捻り込むように突き出した右の拳が下腹部に吸い込まれてゆく。

『……たいしたもんだ』

粉々に吹き飛んだガンマ・ラインを見て、俺は戦慄した。

結果だけ見れば、ガンマ・ラインが瞬殺されたように見える。

だがガンマ・ラインは、細い外観からは想像もつかないが、銃弾や剣戟をものともしない高い防御力を誇り、コマ送りで改めて観ると、超高速で迫る霸王にもきっちり反応しているのが判る。

ガンマ・ラインは階段に足を取られながらも、とっさに残った片足を振り上げ、その鋭利な尖端で、霸王の左上腕一部をバターのようにはり落としていた。

……ま、でも結果はごらんのとおり。

最高位の『神輝金属^{オリハルコン}』の次に硬いとされる『煌白金』を軽く削った攻撃力は信じ難いが、画面に映るガンマ・ラインは腹を貫かれ、

叩き付けられ、バラバラのコナゴナとなった。

つか、霸王強すぎだろ？

『やったな、エル』

万雷の拍手と称賛を一身に浴びる霸王の後ろから、スチームの海に吞まれて死んだと思われたライトニングが現れた。

まさかの人物が現れ、どよめきと共に会場が騒然となる。

『……アルか。ふん、結構やられたじゃないか？』

霸王はまるで驚いた様子もなく、ライトニングの無様な姿を一笑する。

霸王の言うとおり、ライトニングの衣服はところどころ破れ、両手両足を覆う銀色の装甲もわずかに腐食して黒錆びていた。

そんな有様だが、肉体そのものにダメージは見受けられない。

一体、あの状況からどうやって……？

『――で、相手はどうした？』

『ああ、あそこさ』

戦友の嘲笑を軽くかわし、口角をわずかに弛めたライトニングが、ゆっくりとVIP席を仰ぎ見る。

そこには――皇魔王と大鎌の騎士の他に、ライトニングと同様、スチームに吞まれたはずの海鱗族と土蛇族の姿があった。

生きてたのか……？

海棲族と……それから土蛇族もか？

鉄塊すら煙と化す『巨神竜の轟雷』をまともに喰らった海鱗族は、原型こそ留めてはいるが、三叉の矛を杖代わりに荒い息を吐き、鱗のほとんどが黒く焼き焦げ、剥離し、頬や胸や脇腹や太腿から透明な白い筋肉を露出させている。

そして海鱗族と並んで主の前方に立つ土蛇族は、衣服はボロボロだがライトニングと同様にダメージは見られず、獣牙族の物であっ

た金色の鎖を左腕に巻き付けている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1880z/>

外道の王

2012年1月12日21時51分発行